

# 第四章 岩川八幡神社の 弥五郎どん祭りの現状

- 第一節 祭りを支える町と組織
- 第二節 祭礼の準備
- 第三節 本体製作
- 第四節 衣装製作
- 第五節 祭礼の次第
- 第六節 浜下り
- 第七節 例祭
- 第八節 宮仕と祭礼具
- 第九節 祭りと食事
- 第十節 奉納芸能・奉納武道・屋台等
- 第十一節 弥五郎どんの文化的広がり
- 第十二節 コロナ禍での祭りの様子



岩川八幡神社遠景（平成 27 年 11 月 3 日）

# 第四章

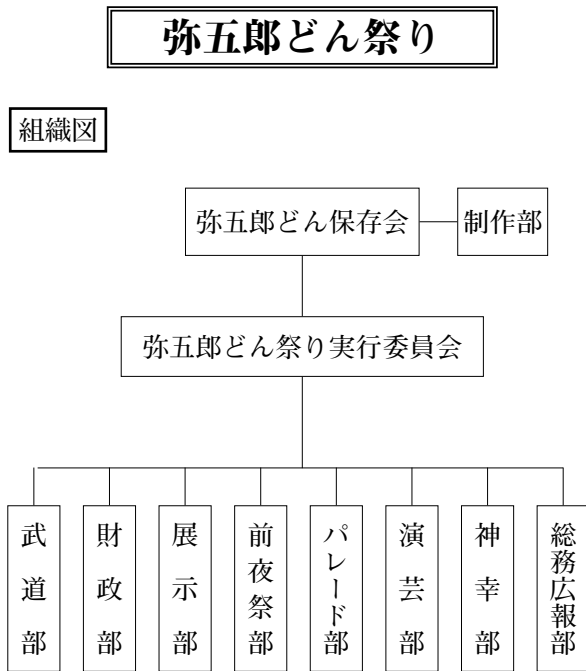
## 岩川八幡神社の

### 弥五郎どん祭りの現状

#### 第一節 祭りを支える町と組織

##### 一 祭りの体制

現在の岩川八幡神社の弥五郎どん祭りは、右図のとおり、弥五郎どん保存会が主体となり、その下に弥五郎どん祭り実行委員会（以下祭り実行委員会）を設置し、祭り自体を運営している。実行委員会は、総務広報部・神幸部・演芸部・パレード部・展示部・財政部・武道部から構成されている。また、平成二年から前夜祭が催されるようになり、こちらは前夜祭部として、別に実行委員会体制を設置・運営している。



祭りの組織図

##### 二 弥五郎どん保存会

弥五郎どん祭りの保存について、神社移転前後はよく分からないが、昭和二十六年には地元の馬場（上馬場・東馬場）の青年団が主となって執り行っていたことが確認できる。その後、人手不足となったようであり、昭和三十五〜三十七年には壮年を含めた「馬場青壮年団」が祭りの母体となって運営している。

一方、昭和二十八年に任意組合として岩川町商工会が発足し、商工会が弥五郎どん祭りの協賛行事を仕切るようになっていき、浜下りの巡行コースも本町（八坂神社）までに変更となり、祭りの更なる規模拡大の契機となっていく。しかし、すぐに巡行コースが元のルート（岩川小学校まで）に戻る等、初めのうちは神社のある馬場通りと岩川駅周辺の本町通りとの対立も見受けられるが、次第に一つにまとまっていったようである。

その後、昭和四十一年に祭りの運営が、大隅町商工会青年部に引き継がれた時、祭りの運営も大隅町観光協会に引き継がれた。この頃には「弥五郎どん祭り奉賛会」という名称が用いられ、会長は大隅町商工会長が担っていた。

昭和六十三年、鹿児島県指定無形民俗文化財として指定された際に「弥五郎どん祭保存会」という名称が用いられているが、これは便宜上、設定された名称と思われ、祭り自体の運営は「弥五郎どん祭り奉賛会」が担っていた。その後、県補助金を受けるようになっていく過程で、保存会という名称が次第に使用されるようになり、祭りのチラシでも平成十五年から主催の名称が「弥五郎どん祭り奉賛会」から「弥五郎どん祭り保存会」に変更されている。なお、元々の母体が大隅町商工会であるからか、「弥五郎どん祭り奉賛会」及び「弥五郎どん祭り保存会」の名称での会則や

規約等は確認することができず、そもそも存在していないようである。

そして、平成十七年の三町合併による曾於市誕生を機に「弥五郎どん」を永久に保存・伝承していくためには「弥五郎どん」と「弥五郎どん祭り」を明確に区別し、それぞれに対処しなければならぬという機運が高まり、平成二十二年八月二十日に「弥五郎どん保存会」が設立された。

同保存会は、県下三大祭りの一つで、曾於市の代表的な祭りである弥五郎どん祭りの主役である「弥五郎どん」を永久に保存、伝承していくため、強固で充実した組織とし、また、ふるさとの振興に寄与することを目的としている。会則は次のとおり。

#### 弥五郎どん保存会会則

##### (名称)

第1条 この会の名称は、弥五郎どん保存会（以下「保存会」という）とする。

##### (目的)

第2条 保存会は県下三大祭りの一つで、曾於市の代表的な祭りである弥五郎どん祭りの主役である「弥五郎どん」を永久に保存、伝承していくため、強固で充実した組織とし、また、ふるさとの振興に寄与することを目的とする。

##### (事業)

第3条 保存会は、前条の目的を達成するために次の事業を行う。

- ① 弥五郎どん祭りに関すること。
- ② 弥五郎どんを広く内外に普及、宣伝すること。
- ③ 弥五郎どんの保存、伝承に関すること。
- ④ その他前条の目的を達成するために必要な事業に関すること。

##### (事務所)

第4条 保存会の事務所は、曾於市観光協会及び曾於市商工会大隅支所に置く。

##### (組織)

第5条 保存会は、本会の趣旨に賛同する個人、グループ、法人及び団体（以下これらを「会員」という。）をもって組織する。

##### (役員)

第6条 保存会に次の役員をおく。

- ① 名誉会長 1人
- ② 会長 1人
- ③ 副会長 2人
- ④ 理事 16人以内
- ⑤ 監事 3人

##### (選任方法)

第7条 役員を選任方法は、次によるものとする。

- ① 名誉会長は、市長をもって充てる。
- ② 会長・副会長は理事の互選又は推薦により選出する。
- ③ 理事は、総会において、会員の中から選出する。
- ④ 監事は観光協会監事をもって充てる。

第8条 役員の職務は、次のとおりとする。

- ① 名誉会長は保存会の名誉代表とする。
- ② 会長は保存会を代表し、会務を総括する。
- ③ 副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときはその職務を代理する。
- ④ 理事は、事業の実施及び運営を総括する。

⑤ 監事は、会計を監査する。

(役員任期)

第9条 役員任期は、2年とする。ただし、補欠として選任された役員任期は前任者の残任期間とする。

(会議)

第10条 保存会の会議は総会及び役員会とする。

2 総会は、全会員で構成し、3分の1以上の出席で成立する。

① 総会は、会長は年1回招集し、議長は会長がこれにあたる。

② 議事は、出席者の過半数によって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

3 役員会は会長、副会長、及び理事で構成し、会長が必要に応じ招集し、議長は会長がこれにあたる。

第11条 保存会の事業年度毎年4月1日に始まり翌年3月31日までとする。

2 保存会の経費は次の収入をもってこれに充てる。

① 会費 個人2000円

グループ、法人及び団体会員5000円

② 補助金

③ 寄付金

④ その他の収入

(その他)

第12条 この会則で定めるもののほか、保存会の運営に關し必要な事項は、役員会の同意を得て会長が別に定める。

附則

この会則は平成22年8月20日から施行する。

附則

設立当初の役員任期は、第9条の規定にかかわらず平成22年8月20日から平成24年3月31日までとする。

三 弥五郎どん祭り実行委員会

弥五郎どん祭り実行委員会は、弥五郎どん保存会の下に位置し、実際に祭りの運営を担う組織で、その業務は多岐に渡る。

現在は、実行委員長1名(保存会において選任。平成二十二年から現在まで、津曲芳夫氏)、副委員長2名(神社総代会長・JAおお鹿兒島大隅支所長)と、委員三十名前後(八つの部の部長及び副部长二十四人以内)から構成されている。

構成団体は、曾於市・曾於市教育委員会・曾於市議会・曾於市農業委員会・曾於市商工会・おお鹿兒島農業協同組合大隅支所・曾於市森林組合・弥五郎どん保存会・岩川八幡神社・曾於市文化協会・曾於市体育協会・曾於市青年団・曾於市安全安心協会・大隅建設業協同組合・前夜祭実行委員会・麓通り会・岩川本町振興会・曙商店街協同組合・弥五郎太鼓・岩川金融クラブ・岩川郵便局・曾於高等学校・大隅中学校・岩川小学校・弥五郎製作部の二十六団体から構成され、事務局は、曾於市役所商工観光課(末吉町二之方)及び曾於市商工会大隅支所が担っている。

主に大隅町岩川を拠点に活動する団体から構成されており、まさに地元の人々によって執り行われる祭りといえる。  
規則は次のとおり。

弥五郎どん祭り実行委員会規則

平成22年8月20日

(設置目的)

第1条 弥五郎どん祭りの事業実施及び運営を担う組織として、弥五郎どん祭り実行委員会（以下「実行委員会」という。）を設置する。

(組織)

第2条 実行委員会は、別表1に掲げる団体をもって組織する。

(事務所)

第3条 実行委員会の事務所は、曾於市役所商工観光課及び曾於市商工会大隅支所に置く。

(部会)

第4条 実行委員会に次の部会を置く。

(1) 総務広報部

(2) 神幸部

(3) 演芸部

(4) パレード部

(5) 前夜祭部

(6) 展示部

(7) 財政部

(8) 武道部

2 各部の担当団体及び業務については、別に定める。

(役員)

第5条 実行委員会に次の役員を置く。

(1) 実行委員長 1人

(2) 副実行委員長 2人

(3) 部長 8人

番号	団体名	番号	団体名
1	曾於市	15	大隅建設協同組合
2	曾於市教育委員会	16	前夜祭実行委員会
3	曾於市議会	17	麓通り会
4	曾於市農業委員会	18	岩川本町振興会
5	曾於市商工会	19	曙商店街協同組合
6	そお鹿児島農業協同組合大隅支所	20	弥五郎太鼓
7	曾於市森林組合	21	岩川金融クラブ
8	弥五郎どん保存会	22	岩川郵便局
9	岩川八幡神社	23	曾於高等学校
10	曾於市観光協会	24	大隅中学校
11	曾於市文化協会	25	岩川小学校
12	曾於市体育協会	26	弥五郎制作部
13	曾於市青年団		
14	曾於市安全安心協会		

別表1 弥五郎どん祭り実行委員会構成団体

- (4) 副部長 24人以内
- (5) 監事 2人

(役員を選任方法)

第6条 役員を選任方法は、次によるものとする。

- (1) 実行委員長は、弥五郎どん保存会において選任する。
- (2) 副実行委員長は、岩川八幡神社総代会長及びそお鹿兒島農業協同組合大隅支店長をもって充てる。
- (3) 部長及び副部長、監事は、実行委員長の推薦による。

(役員の職務)

第7条 役員の職務は、次のとおりとする。

- (1) 実行委員長は、事業の実施及び運営を総括する。
- (2) 副実行委員長は、実行委員長を補佐し、実行委員長に事故あるときは、その職務を代理する。
- (3) 部長は、部を総括する。
- (4) 副部長は、部長を補佐し、部長に事故あるときは、その職務を代理する。
- (5) 監事は、会計を監査する。

(会議)

第8条 実行委員会の会議は、実行委員会、部会及び全体会とする。

2 実行委員会は、実行委員長、副実行委員長、部長及び副部長で構成し、3分の1以上の出席で成立する。

- (1) 実行委員会は、実行委員長が必要に応じて招集し、議長は実行委員長がこれにあたる。

- (2) 議事は、出席者の過半数によって決し、可否同数のときは議長の決するところによる。

- (3) 規則改正、事業計画、予算及び決算は、実行委員会の議決を得なければならぬ。

- 3 部会は、部長が必要に応じて招集し、議長は部長がこれにあたる。
- 4 全体会は、別表1の団体及び協力団体で構成し、議長は実行委員長がこれにあたる。

(会計)

第9条 実行委員会の経費は、次の収入をもってこれに充てる。

- (1) 補助金
- (2) 広告料
- (3) 寄付金
- (4) その他の収入

(その他)

第10条 この規則に定めるもののほか、実行委員会の運営に関し必要な事項は、実行委員会の同意を得て実行委員長が別途定める。

附則

この規則は、平成22年8月20日から施行する。

附則

この規則は、令和元年8月19日から施行する。

四 実行委員会各部の担当団体及び業務

弥五郎どん祭りにおける実行委員会各部の担当業務は、左の通り多岐にわたっており、弥五郎どん祭り本祭に関する事項は、神幸部が担っている。

【総務広報部】（責任担当団体：曾於市役所商工観光課）

担当団体：市観光協会・市・市森林組合・大隅建設協同組合・岩川郵便局・市議会・市安全安心協会

- ・弥五郎どん祭り実行委員会、全体会、反省会の開催に関すること。
- ・祭り補助金及び前夜祭補助金の申請事務に関すること。
- ・全体の予算、決算に関すること。
- ・駐車場使用許可申請（県総務）、道路占用許可申請（県土木）、道路使用許可申請（警察交通課）に関すること。
- ・各種協力依頼文書、来賓案内文書、祭り後のお礼文書の送付に関すること。
- ・ミスター弥五郎の選考に関すること。
- ・交通規制と雑踏警備等に関すること。
- ・祭り広報用の看板等の設置に関すること。（担当：曾於市森林組合）
- ・交通看板（駐車場、迂回路等の案内板）の設置に関すること。（担当：大隅建設業組合）
- ・広報宣伝に関すること。
- ・前日の準備、当日の設営、翌日の清掃作業に関すること。
- ・各部会との連絡・調整、その他、他の部会に属さない事項に関すること。

【神幸部】（責任担当団体：曾於市商工会）

担当団体：市商工会・JAそお鹿児島青年部・弥五郎太鼓・八幡神社・麓通り会・岩川本町振興会・曙商店街協同組合

- ・弥五郎どんの浜下りに関すること。
- ・弥五郎どんの組み立て準備・製作に関すること。
- ・浜下りルートの上め縄張りに関すること。

- ・賠償責任保険契約申込み手続きに関すること。
- ・部の収支に関すること。
- ・その他、神幸関係に関すること。

【演芸部】（責任担当団体：JAそお鹿児島大隅支所）

担当団体：JAそお鹿児島大隅支所・市・市商工会

- ・のど自慢大会出場者募集に関すること。
- ・演芸大会出演者（プロ含む）の選定、プログラム作成に関すること。
- ・弥五郎苑への施設利用許可申請提出と当日の打合せに関すること。
- ・前日、当日の会場設営に関すること。
- ・部の収支に関すること。
- ・その他、演芸関係に関すること。

【パレード部】（責任担当団体：曾於市商工会）

担当団体：市商工会・JAそお鹿児島女性部・市・市議会・金融機関・岩川高校・大隅中学校・岩川小学校

- ・踊り連への参加団体募集・受付に関すること。
- ・自衛隊の参加要請に関すること。（必要に応じて）
- ・小・中・高校への案内に関すること。
- ・鹿児島交通バスターミナル使用許可申請に関すること。
- ・パレード時の交通規制等に関すること。（警察との事前協議）
- ・各学校吹奏楽部の生徒の送迎に関すること。（市マイクロバスの手配）
- ・楽器（弥五郎太鼓含む）の運搬に関すること。（運送会社の手配）
- ・子弥五郎、孫弥五郎に関すること。
- ・部の収支に関すること。

・その他、パレード関係に係る事項。

【前夜祭部】（責任担当団体：前夜祭実行委員）

担当団体：前夜祭実行委員

- ・前夜祭の準備、運営、実施に関する事項。
- ・予算、決算に関する事項。
- ・その他、前夜祭関係に係る事項。

【展示部】（責任担当団体：市文化協会）

担当団体：市文化協会・市教育委員会社会教育（現・生涯学習）課

- ・文化財等展示に関する事項。（刀・菊・短歌・俳句・書道・絵画等）
- ・部の収支に関する事項。
- ・その他、展示関係に関する事項。

【財政部】（責任担当団体：市商工会）

担当団体：市商工会・市農業委員会・各団体

- ・寄付願文書発行に関する事項。（弥五郎どん祭りに係る奉賛依頼について）
- ・協賛金・寄付金の集金に関する事項。
- ・各団体からの寄付金の集計に関する事項。
- ・市大隅支所等に募金箱の設置に関する事項。
- ・部の収支に関する事項。
- ・全体の会計に関する事項。
- ・その他、財政関係に係る事項。

【武道部】（責任担当団体：市体育協会）

担当団体：市体育協会・市教育委員会社会教育（現・生涯学習）課

- ・各団体の競技参加者数やイス・机等の必要数、記念タオル、賞状、メダル等の取りまとめに関する事項。
- ・各団体へ賞状、メダル、タオルの配布、補助金交付と会計報告等の取りまとめに関する事項。
- ・部の収支に関する事項。
- ・その他、武道関係に係る事項。

五 令和四年度の弥五郎どん祭り事業経過

三年ぶりの通常開催となった令和四年度の祭り開催までの経過としては次のとおりである。

六月二十四日に、保存会総会が開催。令和三年度の事業報告・収支決算や、令和四年度の事業計画・収支予算書の承認や、役員改選が行われる。

令和三年度総会資料より

1 会員数（令和四年三月三十一日現在）

八十六会員（個人会員：七十三名 団体会員：十三団体）

2 役員

名誉会長 五位塚剛

会長 中迫 勇

副会長 津曲芳夫

理事 漆間純明

重久昌樹

八木秀久

森 清美

牧田鉄正 谷口伸一郎

伊地知厚仁 中迫浩志

松尾安次 塚本一義

赤松正志 西留正昭



山下清三 安藤 誠 高松大介  
監事 和田弘幸

### 3 事業実績（令和三年度）

5月21日 弥五郎どん課外授業（岩川小学校四年生）  
6月30日 九州観光事業表彰伝達式（曾於市役所）  
6月30日 弥五郎どん保存会役員会（商工会大隅支所）  
7月9日 弥五郎どん保存会総会（吉兆庵）  
11月3日 弥五郎どん祭り（神事行事のみ開催）  
3月18日 九州がっ祭出展打合せ（商工会大隅支所）  
3月26～27日 九州がっ祭出展（熊本市）

### 4 事業計画（令和四年度）

5月20日 弥五郎どん保存会役員会（商工会大隅支所）  
6月22日 弥五郎どん課外授業（岩川小学校四年生）  
6月24日 弥五郎どん保存会総会（吉兆庵）  
7月10日 関西弥五郎会（大成閣・中止）  
9月24日 隼人の乱1300年記念 シンポジウム  
（隼人農村環境改善センター）  
9月～10月 弥五郎どん祭り広報活動  
10月15日 隼人の乱1300年記念 浜下り（隼人塚周辺）  
10月22日 関東曾於市の会（赤坂エクセルホテル東急）  
11月2日 前夜祭 どんドン祭り（大隅文化会館）  
11月3日～5日 弥五郎どん祭り 本祭  
11月5日 例大祭  
11月18日 鹿兒島やごろう会（ニュー福丸）

### 六 その他祭りを支える組織

かつては昭和六十三年の県指定を記念して、神社側が中心となり、弥五郎講が設立（規約は二二二ページ参照）している。平成二年度までは講員五十七名であったが、三年度には講員数百二名となり金額六十八万七千円に達した。その後、平成十七年曾於市誕生に伴い、同年十月に講を解散、十二万五千八百五十三円は、神社創建千年記念事業費として総代会に引き継がれている。

## 第二節 祭礼の準備

### 一 岩川八幡神社の氏子組織と地域区分

岩川八幡神社の氏子は、元の岩川郷（岩川（旧五拾町）・中之内全域）が氏子区域に該当する。それぞれ戦後の旧小学校区になぞらえ、岩川小学校の岩川校区、菅牟田小学校の菅牟田校区、笠木小学校の笠木校区、旧折田小学校の折田校区の四校区で構成される。（表1）

各校区は複数の自治会から構成されるが、それぞれ近隣の二～五の自治会を一グループとし、全十九のグループに編成される。その各グループから氏子総代一名ずつを選ぶ。氏子総代の任期は三年で、現在はこの氏子総代の中から責任役員が四名選ばれる。責任役員は五名から構成され、残りの一名は宮司が務める。責任役員会は、必要に応じて開催することとなっているが、近年は氏子総代会のみで事足りることが多く、開催されていない。なお氏子総代は、任期満了後も継続する人は少なく、交代の頻度は概して高い。近年の氏子組織の運営は、神職三名と氏子総代として選出された神社総代十九名による総代会を中心として行われる。

氏子総代の主な仕事内容としては、弥五郎どん祭りの準備（草履作り・しめ縄作り等）や例祭等の出仕や、初穂料徴収、神宮大麻の配布、年末年始の神社参拝者への対応等である。総代会は、年五～六回開催される。また、十九名を四班に分けてローテーションを組み、月二回（十一日・二十五日）の神社清掃を実施している。

なお、令和二年当時の年間の運営経費である初穂料（神社奉納金・現在は六〇〇円）を納入する氏子の対象戸数は一七二四戸で、八月頃から十月頃にかけて自治会を通じて戸別徴収するが、年々減少傾向（神宮大麻の納入者は更に少ない）にある。

校区名	大字	集落名（会員戸数）それぞれ [ ] のグループから総代を1名選出
岩川校区 (10名)	岩川 中之内 境木町 下窪町 段中町 鳴神町	[上諏訪 (31)・河原 (22)・西中藪 (28)] [中園 (60)・天神丘 (10)・河原弥五郎 (12)] [上岡別府 (19)・下岡別府 (23)・松田 (30)・郷田 (11)] [上馬場 (45)・東馬場 (68)] [上森園 (23)・中森園 (34)・下森園 (16)・森園 (7)] [飯田 (13)・東飯田 (17)・新原 (55)・別府 (49)・沖上] [西山 (20)・平原 (31)・旭ヶ丘 (10)・東旭ヶ丘 (50) あげぼの (60)] [竹山 (16)・南竹山 (12)・東桜ヶ丘 (112) 桜ヶ丘 (-)] [岩川本町 (50)・日之出町 (21)] [吉井 (36)・元八幡 (15)・新城 (43)・土成 (23)・渡 (10)]
菅牟田校区 (3名)	岩川 中之内	[菅牟田 (30)・浅井 (9)・飛佐 (19)] [東久木山 (15)・久木山 (13)・花白 (9)・葛原 (15)・西葛原 (5)] [新田場 (19)・入角 (10)・神掛 (12)]
笠木校区 (3名)	中之内	[東鍋 (28)・西鍋 (27)・牧 (27)・猫塚 (7)・馬渡 (21)] [東笠木 (60)・西笠木 (52)・東西桂 (14)・桂 (24)・八木塚 (14)] [市吉 (11)・川床 (20)・蕨谷 (20)・柳井谷 (3)]
折田校区 (3名)	中之内	[梶ヶ野 (74)・東迫 (3)] [佐敷 (17)・北 (15)・折田 (31)] [狩谷 (11)・中之内榎木段 (11)]

表1 各校区の氏子構成一覧（令和2年）

神社周辺に関連する祭りの準備は、主に氏子総代と神職たちによって行われている。かつては宮仕も準備に参加していたが、近年は当日のみの参加となっている。

## 二 祭りの準備（神社側を中心に）

大まかに神社側（氏子総代や神主）と、曾於市商工会大隅支所の青年部（農協の青年部も含む）とで、役割分担がなされており、それぞれのペースで準備を行う。

神社側の主な準備事項は、神社周辺の清掃・しめ縄の製作・紙垂作り（三千枚程度）・わら草履の製作（四年に一度）・神事への招待者等の段取り・巫女舞・稚児行列（四年に一回）などである。

令和二年（二〇二〇）は四年に一度の衣替えの年であるが、この年は、しめ縄の他にわら草履も製作する。わら草履は、弥五郎どんをイメージしており、なるべく大きく作る。

製作は、氏子総代及び神主たちが手分けして行い、この年は、十月十八日（日）に氏子総代及び神主たち十七名が参加し、わら草履としめ縄を製作した。わらは三十束ほど用意されるが、しめ縄は八束ほど必要となる。

わら草履は一足製作される。長さは一七〇<sup>センチ</sup>程度、幅は七〇<sup>センチ</sup>程度の大きさで、竹で骨格部分を作り、わらを全体に巻き付けて作る。鼻緒の部分は、赤・青・白の三色の小幅モス（モスリン）。細番手のウールを平織りにした薄く柔らかい毛織物）を使用する。

しめ縄は、本殿・拝殿・慰霊塔用に三本を三本、門守社用に一・八本を二本製作、賽銭箱用にも一本製作した。この日はわら草履のもう片方の製作が時間切れとなり、十月二十八日（水）に、残りの部分を製作した。

紙垂は八垂れで、障子紙一枚で八枚作る。神職で手分けして作成し、およそ三千枚作る。巡行ルートの結界用のほか、弥五郎どんの鉾の部分、弥五郎太鼓用、子弥五郎用、相撲の土俵用と多岐に渡り、用途に応じてサイズも変更している。

また、氏子総代の女性の方は、祭りの期間中に賄いを行う。

巫女舞は、かつては少なくとも昭和三十五〜三十八年に浦安の舞が奉納されていたことが確認できる。その後、途絶えていたが、平成二十三年に復活し、現在に至る。なお現在は基本四人舞で、豊栄の舞を奉納している。対象は地元の中高校生女子で、練習は年間を通して三〜四回行っている。

稚児行列は、現在は四年に一度の弥五郎どんの衣替えと同じ年に実施している。居住地等は問わず、対象者は誰でも参加出来る。浜下りに参加し、神社から曾於市役所大隅支所まで約一・六<sup>キロ</sup>メートルを歩く。

お守り類では、岩川八幡神社のオリジナルとして、弥五郎どんを描いた絵馬やストラップがある。ストラップは、神職の池之上淳一氏の発案で、人気のある弥五郎グッズとなっている。平成二十三年の初登場時（各五百個作成）には、全身像と頭部のみのも二種類があったが、現在は全身像のみを授与している。

弥五郎どんの布は、衣替えで使わなくなった古着は縁起物として、法被等に作り替えられるが、その余り布を用いてお守りとしている。かつては、小物入れを作り授与していた時期もあった。

お清め塩は、お祓いされたもので、在庫が無くなる前に補充を行う。



紙垂

御朱印は、弥五郎どんを描いた物を授与しており、求めてくる参拝客も多い。



絵馬等



弥五郎の着物のお守り



弥五郎ストラップ (平成 24 年撮影)



御朱印

### 三 祭りの準備 (商工会側を中心に)

商工会青年部側の主な準備事項は、街中の巡行ルートに注連縄での結界張り・案内板の設置・弥五郎どん組み立てに関すること・ふるまい用の甘酒及び豚汁のこと・弥五郎太鼓の運営などである。



甘酒



大傘

十月に入ると、旧大隅町内や、曾於市役所付近等にのぼり旗が設置されはじめる。商工会だけではなく、麓通り会やあけぼの通り会等も設置を行い、だんだんと町全体がお祭りムードになっていく。

十一月一日に、神社の参道への提灯取り付けや注連縄張りを実施。

また祭り前日の二日には、曾於市役所商工観光課及び大隅支所地域振興課が中心となって、駐車場等の来客に対する準備を行い、各スポーツ団体関係者及び市役所職員が、各武道大会及び球技大会の会場設営を行う。また二日夕方から、道路の路肩部分に各露天商が当日に向けての準備を始める。

また、大傘は普段は商工会事務所にて保管されているので、こちらも用意する。

### 第三節 本体製作

本体製作は四年に一度実施され、直近では令和二年（二〇二〇）がその該当年であった。

これまでは、竹細工職人で霧島市福山町在住の福丸實氏が製作していた。同氏は妻エル子氏と一緒に、これまで六回本体製作に携わってきたが、高齢となったことを理由に、平成二十四年（二〇一二）が最後の製作（日数にして十一日間）となった。

平成二十八年（二〇一六）からは、弥五郎どん保存会の製作部が技術を継承し、令和二年が二回目の製作となる。中迫浩志氏を中心に、牧田正行氏・吉峯孝二氏・川野洋一氏・小濱健一氏・竹下広一氏の六名によって製作された。全員、商工会に所属、それぞれが各分野に精通しており、皆で和氣諳々<sup>わづか</sup>と知恵や意見を出し合って組み立てていく。九月二十一日の竹切りに始まり、十月二十日に完成した。詳細を記した設計図は無いが、現代の工具【写真1】を使い、実寸大の胴体頂部及び腕部の設計板【写真2・3】で確認しつつ、適宜、前回製作された本体と比較しながら製作していく。実際には作業した人でないと感じがあり、文字で表現することは実際には難しいが、次に製作の大きな記録を記す。

九月二十一日（月）初日。大隅町内の竹山で竹切り（9時〜11時）。製場となる保存会長宅にて神事（祝詞は二二三ページ参照）が行われた後（14時）、へぎ取り。竹切り【写真4】には十七名参加。へぎとは、いわゆる竹ひごのことで、本体製作の重要な材料で、数百本必要となる。今回の竹は、別府集落から十八本（唐竹・市有地）、菱ヶ<sup>こまが</sup>迫集落<sup>さこ</sup>の山中から五本（孟宗竹・個人敷地）と同集落の山中から十本（唐竹・個人敷地）を切り出す。孟宗竹は堅く重いので、骨格部分に使用、唐竹はへぎにし

て全体的に使用する。

今回、保存会では、竹割り機【写真5】及びへぎ取り機を導入（加世田の高倉昭光荒物商店（毎年弥五郎どん祭りにも竹細工商品を出店。口絵五ページ参照）し、作業の時間短縮が図られている。

九月二十三日（水）二日目。十八時〜二十時。六名参加。へぎ取り。七・五<sup>シ</sup>の長さでへぎ取り（十二本割）。それを横に二つに割り（節板を削り取る）、ささくれ等を取り除く。直径一〇<sup>センチ</sup>の輪（胴体部分）を試しに作る。前回の本体を持ってきて確認しながら作業。

九月二十五日（金）三日目。五名参加。昔の本体を運び込み。孟宗竹と唐竹からへぎ取り。

竹割り機で竹を割り、へぎ取りの機械で横二つに割り【写真6】（同時に節板も取る）、三台目の機械で二種類（表皮部分と内側の部分）のへぎを取り出す。本日は唐竹のへぎを約百本（長さ七・五<sup>シ</sup>・幅一〜二<sup>センチ</sup>・厚さ一〜二<sup>ミ</sup>）取る。四年前とは段違いの速さでへぎが作られた。作業効率が格段に上がったことに、皆は口々に「弥五郎さあが持ってきてくれた」と話していた。

腕の骨格部分のへぎ取り（孟宗竹八・五<sup>シ</sup>）。最低十本必要（片方五本）。一台目の機械の刃は七本割と八本割を使用。なお、最初の割り方は五<sup>シ</sup>を越えるので、掛矢で叩きこんで（先の方（細い方）を刃に当てる）から機械にはめ込む。二台目の機械では、節板のみを削り取る。三台目の機械を使用すると、孟宗竹からは二種類のへぎが取れる。

九月二十八日（月）四日目。四名参加。中胴・外胴作り。

胴体の輪（中胴。直径一・二三<sup>シ</sup>（一周三・五五<sup>シ</sup>程度）。骨格を成す部分。幅二・五〜三<sup>シ</sup>。厚さ五<sup>ミ</sup>。孟宗竹。十五本作製。二本の脚部分はまだ作らず）を作る。二周と少し巻く。先端部に切り込みを入れて、針金

で括る。五<sup>ミ</sup>ヘギを二本繋いで、胴体の輪(外胴。直径一・一五<sup>ミ</sup>程度(一周三・六一<sup>ミ</sup>程度)。唐竹。三十本程度用意)を作る【写真7】。

九月二十九日(火)五日目。五名参加。腕製作。胴体製作。編み方開始。昨日の続きで残りの外胴作り。平行して、腕(骨格部分)作り開始。

孟宗竹で、大(直径五<sup>ミ</sup>程度)【写真8】・中(直径四<sup>ミ</sup>程度)・小(直径三<sup>ミ</sup>程度)を二つずつ作る。孟宗竹を細い方を内側に巻く。二巻少しぐらい。竹が厚いので、曲げるのが難しい。切り込みを入れ(ズレ防止)て、針金で括る。

七・五<sup>ミ</sup>ヘギ三十五本(実際は三十本程度で大丈夫だが、割れているのや薄いのもあるため、予備として用意)のヘギを抽出し、中央(三・七五<sup>ミ</sup>程度)に印を付ける。

三十本のヘギを使い、編み方開始。手板(原寸大の設計図を書いた板)にヘギを合わせて、六つ目編みで、前回の記憶を呼び戻しながら編んでいく【写真9・10】。始めは苦慮するが、要領が分かってくると、編み方も早くなる。三方向十本ずつ使用。なお設計板には十二本ずつ描かれていた(三十六本必要)が、それぞれの両端は角にあたり編むことが出来ないため、実際は十本ずつで編み込む。

九月三十日(水)六日目。五名参加。胴体製作(一〜九巻目)。

上部に内胴(孟宗竹)を置き、外胴(唐竹)を編み込んでいく。二巻目(外胴)までは、中に一人入って支えながら編み込む【写真11】。最後に少し絞り、本体を横向きにし、ヘギを同じ向きで集めて、外胴・内胴を交互に入れ込み、ビニール紐で固定していく【写真12・13】。外胴は、ジョイント部分にマジックで印を付け、組む時に同じ方向に並ばないようにしている。九十度ぐらいを目安にずらす。後で、絞り込む。輪と輪の間は十<sup>ミ</sup>。今年は、サラシ部分の補強として、中胴を使う計画であり、前回

の経験を踏まえ、細かい工夫や改良が施されている。

なお、昔の本体は、全て荒縄を用いて男結びで固定していたが、現在は丈夫で扱いやすいビニール紐を用いて真結びで固定している。

十月一日(木)七日目。五名参加。胴体製作。(十〜十七巻目)

前日の続きで、外胴を入れて編み込み【写真14】、二巻おきに中胴を入れる作業を繰り返す。中胴を入れた時に、外胴を絞り(ペンチで外胴の両端を掴み絞る)、形を整える【写真15】。適宜、ビニール紐で固定していく。

十五巻目完成時点で、中胴は孟宗竹五本、唐竹七本あり。ここから、サラシに該当する部分の補強のために、中胴を使用する。まず、十四巻目に入れ込む。

十七巻目まで完成した【写真16】ところで、ヘギが短くなったので継ぎ足す。五<sup>ミ</sup>ヘギを細い方からビニールテープで(二カ所)結ぶ。六十本あり。本日の作業終了。

十月二日(金)八日目。五名参加。胴体製作(十八〜二十六巻目)

前日の続きで、外胴を入れて編み込み、サラシに該当する箇所にも、補強として中胴を入れ込んでいく【写真17】。中胴の部品が不足したため、孟宗竹を使って新たに作りはじめる。この日は二十六巻目(二五〇<sup>ミ</sup>)まで完成。

十月五日(月)九日目。六名参加。腕の部品製作。頭の部品製作。

十二本のヘギ(孟宗竹・長さ八・五<sup>ミ</sup>、幅三〜四<sup>ミ</sup>)を用意(実際使用するのは各五本で、二本は予備(細いのは使用しない)し、曲げる部分に印を付け(黒マジックが曲がる部分、赤マジック二本が曲がりやすくなるように薄く削る範囲)で、面取り(薄く削ったり、ささくれ等を取る)作業。その後、ガスバーナーで曲がる部分を温めて【写真18】、焼酎瓶を



当てて曲げる。適宜、濡れタオルで熱を冷まし、図板に合わせて曲がり具合を確認する【写真19】。頭の中骨に当たる部分の五<sup>ノ</sup>ヘギ（唐竹）を用意し面取り。一周一三五<sup>センチ</sup>程度、直径四五<sup>センチ</sup>程度ぐらいで中回しで輪を作る（2周ぐらいで、残りは切除）。

十月六日（火）十日目。三名参加。腕製作。

八・五<sup>ノ</sup>の骨格部分に該当するヘギ五本（孟宗竹）を組み合わせて、中胴（付け根から一五<sup>センチ</sup>のところ）を一つ入れ込む作業を行う。左右とも完成品を見る限りでは、五本の組み合わせに特に基準は無い模様。

十月七日（水）十一日目。五名参加。腕製作。頭の部品製作。

頭の中胴（唐竹）の不足分を作る【写真20】。直径四五<sup>センチ</sup>。幅一・八<sup>センチ</sup>程度。腕の中胴二本目、三本目を入れ込む作業。それぞれ三〇<sup>センチ</sup>間隔（あとで間には外胴が来て、見た目は全て一五<sup>センチ</sup>間隔となる）で、左右作る。

次に、唐竹のヘギを四十八本用意（十二本×二本一組×両腕（二本）し、センターに印（二五〇<sup>センチ</sup>）を付ける。左腕から製作。丈夫そうな方（ヘギの幅が厚い方）を左（弥五郎どんの肩部で人が立つため）にしている。

原寸大の図板に二十四本のヘギを当てて、六つ目編みを行う。始めにセンターを作り、そこを基準にヘギを追加。適宜編んでいく【写真21・22・23】。二本一組だが、それぞれ食い違う（重なるのはセンターを中心とした部分のみ）ように編み込む。編み上げたら、骨格部分を中心に、上部を結ぶ。腕では一番難しいところ。組み合わせる時に、（結ぶ時にズレていくので）マジックで中胴にセンターの印を付けていた。次に本体を回しながら、外胴（横ヘギ）を入れ込み（二周ぐらい）編んでいく。

十月八日（木）十二日目。四名参加。左腕製作。胴体製作。二十一時半過ぎまで。

左腕の外胴二本目から作業開始。適宜、ペンチで外胴を絞めていく【写真24・25】。長いヘギを交差させていく。八本外胴を入れたら、唐竹ヘギが内側になるようにまとめる。始めに、骨格部分の五本のヘギを曲げ、肩部と手先をビニール紐で仮留めする。その後、唐竹ヘギを大きく二束に分けてまとめたものを、孟宗竹ヘギに沿う形で曲げていく【写真26】。適宜、ビニールひもで縛っていく。左腕完成。

この日は、テレビ局（KTS）取材対応のため、二十時以降も引き続き作業を実施。本体外胴二十七巻目から再開（テレビ取材に合わせて胴体製作を停止していた）となり、同じ工程の繰り返し。二十八巻目外胴↓二十八巻目中胴↓二十九巻目外胴【写真27】↓三十巻目外胴【写真28】↓三十巻目を入れ込む。編みながら、回しながら、長さを確認しながら、形を整えて、ビニール紐で固定していく。取ったヘギは、乾燥する前に作業した方が曲げやすい。乾燥すると折れやすくなる。

十月十二日（月）十三日目。四名参加。胴体製作。右腕製作。

胴体製作の続き。三十一巻目外胴↓三十二巻目外胴↓三十二巻目中胴【写真29】↓三十三巻目外胴↓三十三巻目中胴（最後）。外胴の間隔は一〇<sup>センチ</sup>置きとなっている【写真30】。本体の長さ三二<sup>センチ</sup>。前回の本体は三十巻で三二<sup>センチ</sup>。今回は三十三巻で三二<sup>センチ</sup>。

前回は、一〇<sup>センチ</sup>幅で均一に揃えること（間隔を詰めること）が出来なかった。これは、ヘギ作りが機械化により幅や厚さを均一にできるようになったということと、製作部の前回の経験と技術の向上により可能になったと考えられる。

右腕の骨格部の修正。肩に近い方の輪とヘギを針金で固定。二本目と三本目も要所（長いヘギは両端の二本を短いヘギは中央の一本のみ結び、稼働幅は残しておく）を針金で固定する。

右腕の外側の製作【写真31】。唐竹のへぎを四十八本（片腕二十四本）用意し、六つ目編み開始。工程は左腕と同じ。二本目、三本目の外側の輪を作る。適宜、絞り込みを行う。

十月十三日（火）十四日目。五名参加。右腕製作。頭の部品製作。昨日の続きで右腕製作。四本目、五本目の外側の輪を入れ込む。先に完成した左腕と比較しながら、適宜絞つて形を整える。

前回の頭を本体及びアルミの骨格から外す。アルミの骨格に若干の改良を施す模様。また、守人（弥五郎どんの肩に立つ人の呼び名。令和二年命名。商工会青年部から皆の総意で決定される）の命綱（細いが丈夫を念のため取り換えることに。以前の紐は太すぎて肉刺が出来たらしい。六本目、七本目、八本目を入れる。ここでも適宜絞り調整する。八本目まで入れたら、腕の唐竹へぎを大きく二つに束ね、ビニール紐で括る。腕の曲がり具合を同じにするために、両腕を並ばせ、ビニール紐で同じポイントで固定し矯正【写真32】。両腕完成。

頭のへぎ作り。機械化により十五本程度を短時間で作ってしまう。五<sup>目</sup>へぎ（実際は三・五<sup>目</sup>と短いのもあり。最終的には余計な分は切り取る）を十二本用意。一七五<sup>センチ</sup>で印を付けて、六つ目編みをする時の基準とする。なお、頭の高さは八〇<sup>センチ</sup>。

十月十四日（水）十五日目。三名参加。頭製作。別に一名アルミ頭部の改良補強。

頭の六つ目編み開始。十二本の唐竹へぎを用意し、一人で編み始め【写真33】、外側一卷目を入れ込む。二巻目の外側を入れる作業から、撮影に來ていた曾於市役所大隅支所産業振興課職員（安藤氏）が加勢する。一卷目の中胴を入れ、ビニール紐で固定（なお奇数巻は特に固定していない）する。各巻の間隔は一〇<sup>センチ</sup>。

三巻目外側↓三巻目中胴↓四巻目外側↓五巻目外側↓五巻目中胴↓六巻目外側↓七巻目外側↓七巻目中胴【写真34】。ここで、前回の頭部と比較しながら形を整えていく。八巻目外側を入れて完了。頭のへぎはもう少し厚くてもいいかとの意見あり。

十月十五日（木）十六日目。五名参加。アルミ胴の入れ込み準備。前回のアルミ胴と竹胴との切り離し作業。その際、アルミ胴の下半身にクラックを発見。補強の必要あり。なお、アルミ頭部は改良補強済【写真35】。

竹胴体の正面を決める。なるべく形の良い面を正面に据え、印を付ける。アルミ胴と竹胴の間に入れる竹割り作業。孟宗竹四本使用、八本（三<sup>目</sup>作り、隙間に合う竹を挿入する予定）。

竹胴に、そのままの唐竹二本（長さ三<sup>目</sup>。幅一〇〜一二<sup>センチ</sup>）を背面に入れて、アルミ胴を入れ込む。その隙間に、半分に割った竹を挿入していく。今回は、試しに入れて確認したのみ。

今回、腕と胴体を連結させる部分の一本竹（孟宗竹）は、前回のものをそのまま使う予定とのこと。この竹が丁度入れやすく、しつくりくるとのこと。（結果的には、最終日に新しい一本竹を用意した）

頭と胴と繋げる時、へぎを肩に編み込んで強くする。アルミ胴【写真36】の修復をしないと先に進めないため、本日はここで終了。

十月十九日（月）十七日目。五名参加。アルミ胴の入れ込み。脚製作。頭部取付。二十一時まで。

修復されたアルミ胴を竹胴に入れ込む作業【写真37】。まず、背部に丸竹（孟宗竹）二本を入れ、その上を滑らせるようにアルミ胴を入れ込む。ビニール紐でアルミ胴と丸竹を括る。次に、半竹を正面二カ所（右↓左



に入れ込む。

確認のため、前回の腕連結(三・七<sup>上</sup>)の猛宗竹を入れ込む。胴体上部のすぐ下、一巻目と二巻目の間、アルミ胴の骨格部の前に連結させる竹が入る。

半竹を両横に入れ込む。二本目は入りにくいので木槌を使って叩き込み、これでよく締まる。ステンレスワイヤーで括る。

アルミ頭部の取り付け【写真38】。同時に腹部にアルミ臍の取り付け。同じ頃、脚部二本の輪(直径約六五<sup>センチ</sup>、周囲二〇二<sup>センチ</sup>)作り。

上部へ半竹四本(守人が立つ部分)を入れ込む。隙間が狭く入れにくい、調整しながら入れ込む。

脚部製作。まず左脚から行う【写真39】。ヘギを半分に分けて、輪を入れ込む。そして不要なヘギを(1<sup>センチ</sup>程度残して)切り取る。ヘギを折り曲げ輪に絡めながら、胴体へ入れ込む。内側のヘギは輪に重ねて、ビニールテープで括る。同様に右脚を作る。最終的には、楕円形(八〇<sup>センチ</sup>×四〇<sup>センチ</sup>)となる。

頭部に入れ込み。全方向同時にヘギを胴体部に入れ込んでいかないと上手く入らない。竹頭とアルミ頭をビニール紐で括る。塩ビパイプを正面(大)と背面(小)に入れ込み、絞める。頭頂部の鳥(頭と尾)が入る部分をマジックで印を付けて確保する。また、頭部左側に守人の命綱を入れ込むので、その印も付けておく。

胴体上部の不安な部分にヘギを入れ込み二重にして、補強する。

話の中で、孟宗竹はあと一本多くてもいいかとの意見あり。

十月二十日(火)十八日目。五名参加。胴体仕上げ。脚の荒縄巻き。腕仕上げ。完成。

胴体の仕上げ。竹胴とアルミ胴をビニール紐で括る。六本の芯となる

竹を主に、荒縄を用いて括る。その際、竹の間が等間隔になるように微調整していく。

荒縄を脚の輪の部分に巻いていく。二重で巻いて【写真40】いくと速い(今回は一本巻きで非常に時間が掛かった)。時々、ヨリを戻しながら(伸ばしながら)巻いていく。荒縄は途中で接ぎながら、左脚↓右脚の順で巻いていく【写真41】。脚の長さ十六<sup>センチ</sup>。

腕の連結部の竹探し。余った竹の中から、真つ直ぐで、節から節で三・七<sup>センチ</sup>になる竹(猛宗竹)を探す。太い方を左腕側に使う。

腕の仕上げ。今回はロックタイで括る。

頭の命綱を設置(新しいのに取り換える予定だったが、まだ大丈夫との判断で、そのまま使用)する。工場での製作作業終了【写真42】。

十月二十四日(土)岩川八幡神社へ本体をトラックにて運びだし。

十月二十五日(日)八時半から十二時にかけて、神社にて衣装合わせを実施。なお、衣装は前回のものを使用。

両腕を固定し【写真43・44・45】、上着を着せた後【写真46】、台車に固定し立てる【写真47】。両腕の交点(手首部分)と鉾を結び付け【写真48】、余分なヘギを切り取り、両腕のバランス調整【写真49】、守人の乗る左肩部の補強(番線やサラシを使用)等を行う。また、胴体内部から腕の連結部の確認や、頭部と弥五郎面の間を巻く布の量の確認や、頭頂部に設置する鳥と尾羽の設置場所等の確認を行う。

確認後、全て解体し、当日を待つこととなる。

なお、前回の衣装は、縁起物として、法被や御守り等に転用される。また、前回の竹製の本体部分は、十一月五日の神事後に御焚き上げ(焼却)された。また、腕の一部は、藁草履の骨格部に転用、腕の連結部の一本竹については、弥五郎太鼓のバチに転用された。



写真 11 中に一人入って編み込む



写真 6 孟宗竹の節板を取る。腕  
なので2つには割らない



写真 1 工具



写真 12 ヘギを同じ向きで集める



写真 7 ヘギ 2 本 (5 m) を繋ぎ、  
外胴 (唐竹) を作る。



写真 2 胴部の手板



写真 13 ヘギを同じ向きで集め  
て、外胴を入れ込む



写真 8 腕 (大・直径 50cm)



写真 3 腕部の手板



写真 14 外胴 12 巻目



写真 9 編み込み作業



写真 4 真っ直ぐな孟宗竹を選ぶ



写真 15 中胴 (孟宗竹) を 13 巻  
目に入れ込むところ



写真 10 六つ目編み (10 本ずつ  
3 方向)



写真 5 孟宗竹を割る





写真 26 要所を括る



写真 21 腕（2本目）の中胴入れ



写真 16 中胴 13～17 巻目まで連続して組んでいる



写真 27 外胴 29 巻目



写真 22 同じ向き（向って左側2本ずつ）で集めていく



写真 17 本体 22 巻目（中胴あり）まで



写真 28 外胴 30 巻目編み込み中



写真 23 外胴 1 本目がほぼ終了



写真 18 曲げる部分をバーナーで熱する



写真 29 中胴 32 巻目



写真 24 外胴 4 本目編み込み



写真 19 手板にあてて確認



写真 30 外胴の感覚が 10cm置き



写真 25 外胴 5 本目編み込み



写真 20 奥では頭部の中胴を作っている





写真 41 荒縄巻き完成



写真 36 アルミ胴



写真 31 骨格部分を持ってくる



写真 42 製作部 (右上から中迫・牧田・小濱、右下から川野・吉峯)



写真 37 正面に2本半竹をいれる (2本目)



写真 32 両腕の曲げ具合を合わせる



写真 43 印を付ける

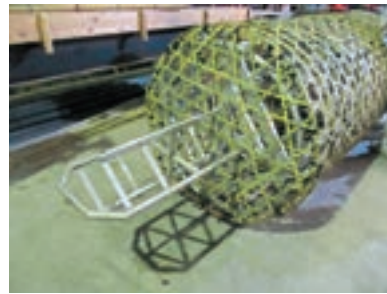


写真 38 アルミ頭部設置



写真 33 編み方開始 (頭部)



写真 44 両腕の固定



写真 39 左脚製作中



写真 34 中側7巻目を入れる直前



写真 45 両腕の番線での固定完了



写真 40 二重で巻くのでスピードが速い



写真 35 アルミ頭部



写真 49 両腕の調整



写真 48 手首部分と銚を固定させる



写真 46 左腕へ着物を通す



写真 47 台車に固定し、両腕の具合を確認

胴本体の内訳 (最終)

外胴 (外側)	周囲 3.61m (直径 1.15m) × 33 本
	33・32・31・30・29・28・27・26・25・24・23・22・21・20・19・18・17・16・15・14・13・12・11・10・9・8・7・6・5・4・3・2・1 (唐竹)
中胴 (内側)	周囲 3.35 尺 (直径 1.13 尺) × 22 本 (サラシが巻かれる部分に該当する 13~22 巻目は内胴で補強。うち 21・19・17・14 は唐竹を使用)

図 1 胴本体の内訳

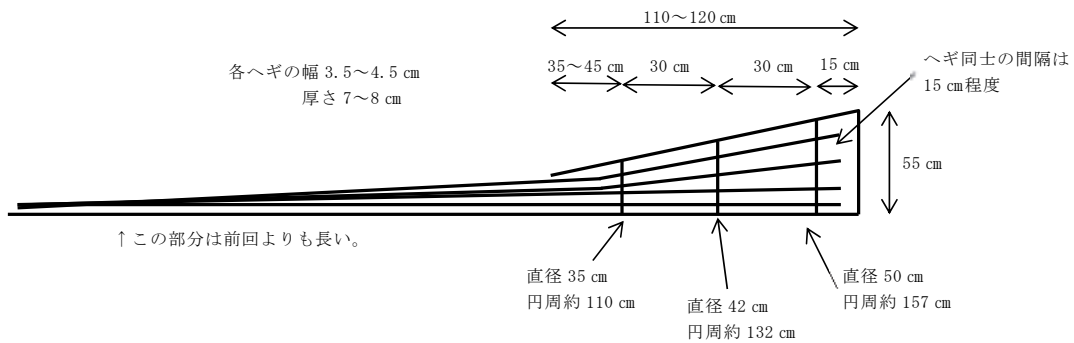


図 2 腕の略図 (骨格部)

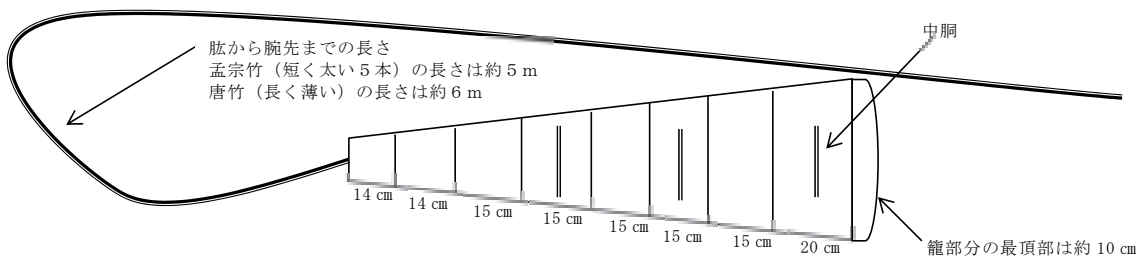


図 3 腕の略図 (外側)

## 第四節 衣装制作

弥五郎どんの衣装について『麿藩名勝考』に「(略) 木綿拾三反二而梅染の単衣を製着す。又、太刀大小を佩し、大いなる荷苞を提げ(略)」とある。

これによると、十三反の梅染めの単衣の衣装をつけ、大きな荷苞(布袋)を提げていたことがわかる。

また、『三国名勝図会』には「(略) 身の丈一丈六尺、梅染単衣を着て、刀大小を佩<sup>お</sup>び四輪車の上に立つ、此人形は、土人傳へて、大人彌五郎といひ、又、武内宿禰なりといふ」とある。これによると、身の丈が一丈六尺であること、梅染の単衣を着ていることは記されているが、布の量と大きな荷苞のことは記されていない。

『大隅町誌』には「(略) 弥五郎どんは御神幸の先駆露払い、すなわち先導者を表したもので、身長一丈六尺で神体は竹籠製である。四輪車上に立ち梅染赤土色の単衣袴(十六反)を着用し、鉢巻や帯胴巻等約廿反の木綿を装い長さ一丈四尺の太刀、九尺四寸の小刀を帯び、大きな巾着を付け一丈八尺の鉾を杖について、(略) 弥五郎どんの胴体は竹籠でバラ職人の請負で毎年作り替えられ、祭終了後神社の裏山に捨てられる。衣装の布は十六反で四年位でつくりかえる。(以下略)」とある。身の丈が『三国名勝図会』と同じ一丈六尺でご神体が竹籠であること、そして、十六反の赤土色の梅染の単衣の上衣と袴を着ていること。さらに、鉢巻や帯胴巻など木綿二〇反をつけていることを記してある。また、弥五郎どんの胴体は竹籠で、バラ職人の請負で毎年作り替えられ、祭のあと神社の裏山に捨てられること、衣装は四年で作り替えられることなどを具体的に記してある。

また、『大隅町誌(改訂版)』には、「本体は竹籠状のもので、二五反も

ある梅染の単衣を着せる。昔は、弥五郎どんの着物を縫うのは縫之蘭方限(吉井集落)の人たちに決まっていた。弥五郎面をつけ、鳳凰の冠を付ける。黒鞆の大小・鉾・印籠などをつける。(中略)。下駄や草履や傘などの奉納もある」とある。

二五反の梅染の単衣を着せること。ここで、初めて着物を縫う集落が縫之蘭方限(現在の吉井集落)に決まっていたこと、これは、極めて重要な記録である。

また、下駄・草履・傘などを奉納することなどが明らかにされている。令和四年弥五郎どん祭り当日、下駄は以前奉納されたもの(昭和五十六年に寄贈されたもの)を供えてあり、草履は令和二年に神社関係者・祭関係者によって作製されたものを下駄と一緒に弥五郎どんの前に奉納している。傘はずいぶん古いものである。

布の量について『村田熙選集1 盲僧と民間信仰』に「(略) 衣装の布は十七反で、この方は四年位でつくりかえるとのことである。(略)」ここでは、布十七反を使うことが記されている。

これらの文献を見ると、布は十三反・十六反・十七反・二五反とまちまちであることがわかる。布の一反は和服生地では並幅の場合、幅は三六<sup>センチ</sup>、長さ約十一〜十二<sup>センチ</sup>、大幅の場合は幅七十二<sup>センチ</sup>、長さ五〜六<sup>センチ</sup>である。現在、洋服仕立て用の布は九十二<sup>センチ</sup>幅で、長さ約十一<sup>センチ</sup>、このように布幅と長さが違うことよって反物数が変わるのである。現在は九十二<sup>センチ</sup>幅、長さ二十三<sup>センチ</sup>の物を五反購入している。

(一) 弥五郎どんが着ている梅染の着物はどのようなものだろうか

布地の梅染について『貞丈雑記』に「加賀梅染と云は加賀國より出る梅染の絹也。梅染とは梅やしぶと云物にて染る也。赤き色に黄(キバ)



みある色也。【頭書】梅染、赤梅、黒梅三品アリ。梅やしぶにてざつと染めたるは梅染め也。小敷を染めたるは赤梅也。度々染て黒みあるは黒梅也。」と記されている。

ここに出てくる梅やしぶ(梅屋渋)というのは梅汁と同じで、梅の木を細かく刻んで出した液に椀皮の煎じた汁を加えたものである。江戸時代には大坂でこれを専門に商う梅汁梅問屋があったという。

『新版 日本の伝統色』には

「梅染の初見は『日本染織譜―その色と色調―』(略)室町時代から行われた染色である。その染法は『秘事記』に梅染の法。梅の木をこまかに打ちわりて、水にせんず。布一端には、水三升程入、二升二合にせんじ、早稲藁を黒焼にして、右の煎じ汁を三四返そそぎ、其灰汁にて三返染るもし洪染にせば、右の灰汁にて数へんそめて色よき時、其上を薄洪にて二三返そむればはげず、と記されている。この梅染を少し濃く染めて赤を強くしたものは「赤梅」更に濃く黒みかからせたるものは「黒梅」と呼ばれる。(以下略)。この梅染は産地名をつけて「山城梅染」「加賀黒梅染」と呼ばれる。その染料の梅屋渋は江戸時代の家庭茶染の主要な染料であった梅染の色は、用いられる灰汁、ミョウバン、石灰、鉄漿の配合や分量次第で色々な茶色が得られる。」とある。

これらの文献から見ると梅染の布は京都の公家・武家の世界では贈答品として広まり、加賀では献上品として重宝だったことがわかる。

染料として使うのは梅の実ではなく幹や皮を砕き煮出した液を使ったこと、梅染にも煮出した液の濃度、染める回数や媒染によって色が淡い色(赤みをおびた赤梅)から濃い色(黒梅)まであることなど、色調についても詳しく述べている。

梅の木による染色は、室町時代に盛んになり梅染は梅だけでなく椀

木、楊梅(やまもも)と混合した染めもあった、ということが書かれており、梅染が室町時代に盛んに行われた。

実際、梅の幹を燃やし灰を作り、媒染液としての灰汁を作り、幹を刻み煮煎じて染料を作り染めて梅染を作ったこと、梅染とはどういうものかということ、『ちよう、はたり』には「古来、梅染は桃染めといわれ、日本の染料としては最も古く、法隆寺献納宝物の中の幡(飛鳥時代)に残されているのはじめ、日本書紀や延喜式にも桃染めとして記載されている。なぜ、桃染めと呼ぶようになったかは諸説あるが、硬い果実を「実」と呼び柔らかな果実を「もも(百々)」と呼ぶところから梅の実をももと言ひ、實際に梅の木で染めたところ美しいもも色に染まったところから、桃染めと言われるようになったという。(中略)古来梅は中国では、すでに神格に近いその香気を讃えられ(以下略)」と記されている。

このようなことから、梅染は先に述べたように実ではなく樹木を切り刻んで煮出した液で染めるものであるが、その樹木になった実には再生力や神霊があるということが前の文献などでわかる。そうであれば、実をつける本源である樹木は実以上に力があり、樹木から取り出した液で染めた布にも、このような力が宿っていると考えられる。それ故に、樹木を切り刻み煮出した梅の液で染めた梅染の着物を着せ、五穀豊穡や無病息災などを願いつつ、狭い拝殿から広い境内に四苦八苦しながら弥五郎どんを一年に一回再生させていると考えれば、他に藍や茜などいくつらでも植物染料はあるのに、あえて梅染にこだわる理由が理解できる。

また、中国では梅(梅の花)は神格に近い香りを古来から讃えられていた、ということであるから、神社に関係ある弥五郎どんの衣装に梅の木を切り刻んで煮出した液で染めた布を用いても決しておかしくない。

(二) 弥五郎どんの衣装は誰が縫い、受け継いできているのだろうか。  
岩川八幡神社は大正三年に現在地に移転したが、それまでは吉井集落の元八幡(六戸)と縫ノ藪(十二戸)の二つの集落の所にあり、この縫ノ藪集落の人たちが弥五郎どんの衣装を縫っていた。この縫ノ藪は「ニノソソ方限」という門集落である。このニノソソ方限について『地名散歩』に次のようにある。

「例祭の弥五郎どんの梅染単衣の着物は四年ごとに新調されるが、これを縫う担当の方限(集落)は決まっていた。それが「ニノソソ方限」であるが、ニノソソは「縫ノ藪」の方言である。ニノソソは今の吉井集落の前身であり、神社に最も近い集落であった。新調する弥五郎どんの単衣を縫う役目の方限であったから縫ノ藪と名付けたという。文書関係に出てくる縫ノ藪門の方限となつたと思われる。中には縫ノ藪と記されている文書もあるが、藪の草書または略字は留と似ているので藪を留と誤写したのか別に縫ノ藪があつたのか判然としない。なお縫ノ藪方限はその後、清水が湧き出る泉が大隅警察署の奥にあつたことから「吉井」と改称されたが、この泉も今は枯れている。」

このことからわかるように、縫ノ藪で弥五郎どんの衣装を縫うようになったのは、縫ノ藪が八幡神社に近い集落で弥五郎どんの衣装を縫う役目の方限であつたからだという。

このようなことから、大正三年に現在の八幡神社の所に神社が移り、昭和二十七年に八幡の字が元八幡に、ニノソソ(縫ノ藪)が吉井と名称が変更になった。このいわれについては吉井沿革史として霊園の石碑文に記してある。

大正三年に神社が移転してから、弥五郎どんの衣装を縫うのは神社近くの上馬場集落と東馬場集落になった。この集落は昔から麓集落として

岩川の町と並ぶ商業地で、戸数も多く八幡神社・小学校の地元で弥五郎どんは小学校の校庭に浜下りして長時間鎮座した。参拜者も小学校で弥五郎どんを拝顔していたとのことで、また、国防婦人会も東馬場の方で統率力があり、婦人会が協力した。

その当時は上衣を縫う集落と袴を縫う集落が交互になっており、四年に一回閏年に縫っていた。例えば今年、上馬場集落が上衣を縫ったら東馬場集落は袴を縫い、袴を縫う集落が台車カパーも縫うことになっていった。四年後には上衣と袴を縫う集落が逆になる。このようにして平成二十年(二〇〇八)までは交互に行っていたが、平成二十四年(二〇一三)から民生委員を中心に有志が集まって縫うように変わった。

### (三) 古い弥五郎どん衣装の利用方法

弥五郎どんは武の神・健康の神と言われ弥五郎どん起こしの綱を引けば一年中病気をしない。特に着古しの衣装を身に着ければ元気になるといわれているので、四年に一回縫い替える弥五郎どん衣装のおさがりは、大人用や子ども用のハッピに仕立て直し弥五郎どん祭りに着るようになっている。残った切れ端の小さな布切れはお守りの中に入れるなどして布を大切に生かしている。

### (四) 現在の弥五郎どん衣装製作

現在の弥五郎どん衣装縫いについて、どのような手順で決められているかという点、衣装製作の年の九月頃、八幡神社から婦人会の民生委員の役員へ話がある。だから、氏子だけではない。

縫い方は、以前は手縫いであつたが現在はミシンで縫っている。

弥五郎どんの衣装の裁ち方・縫い方は、民生委員の方々と有志が指導





(3) 台車カバー

弥五郎どんが町の中を巡行行列する時、弥五郎どんを台車に乗せて小学生が引く役割を持つ。この時、台車を弥五郎どんの衣装と同じ布で包む。

台車カバーは長さ一三・六〇メートル、台車紐幅二三センチ、長さ一一・〇センチで仕上がり一一・八センチと一〇・五センチで二〇本。台車の窓部分は幅一一・二センチ×六〇センチで仕上がり幅五センチ×五十八センチを四本。

(4) マスク

弥五郎どんは、これまでマスクを付けることはなかったが、令和元年から感染症のコロナが流行したため衣装製作をした令和二年の弥五郎どん祭りでは、感染予防のためにマスクをつけることになったので製作した。しかし、コロナ禍での御神幸は縮小して神社鳥居の所までの御神幸となったためマスクは付けなかった。

令和四年の弥五郎どん祭りでは、コロナ禍の中ではあったが、祭りが行われ弥五郎どんもマスクは付けず浜下りに出かけた。

マスクは縦四五センチ、横七十二センチ。ゴム紐七十五センチ。

弥五郎どんの衣装(上衣・袴)と台車カバー・マスクの製作図は別頁(九三〜九四ページ)のとおりである。

衣装・マスク・

台車カバーの出来上りは写真のとおりである。



台車カバー



マスク



衣装制作風景 (令和2年9月16日)



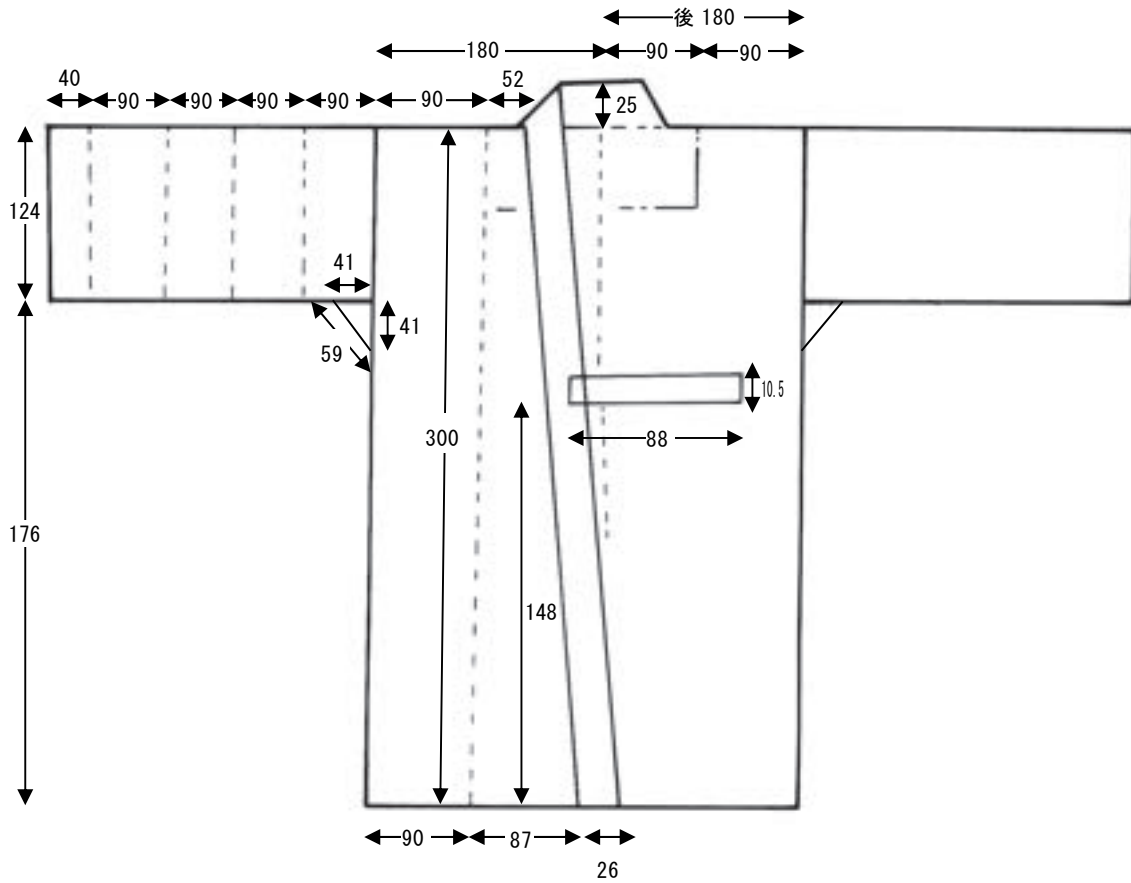
衣装製作風景 (令和2年9月14日)



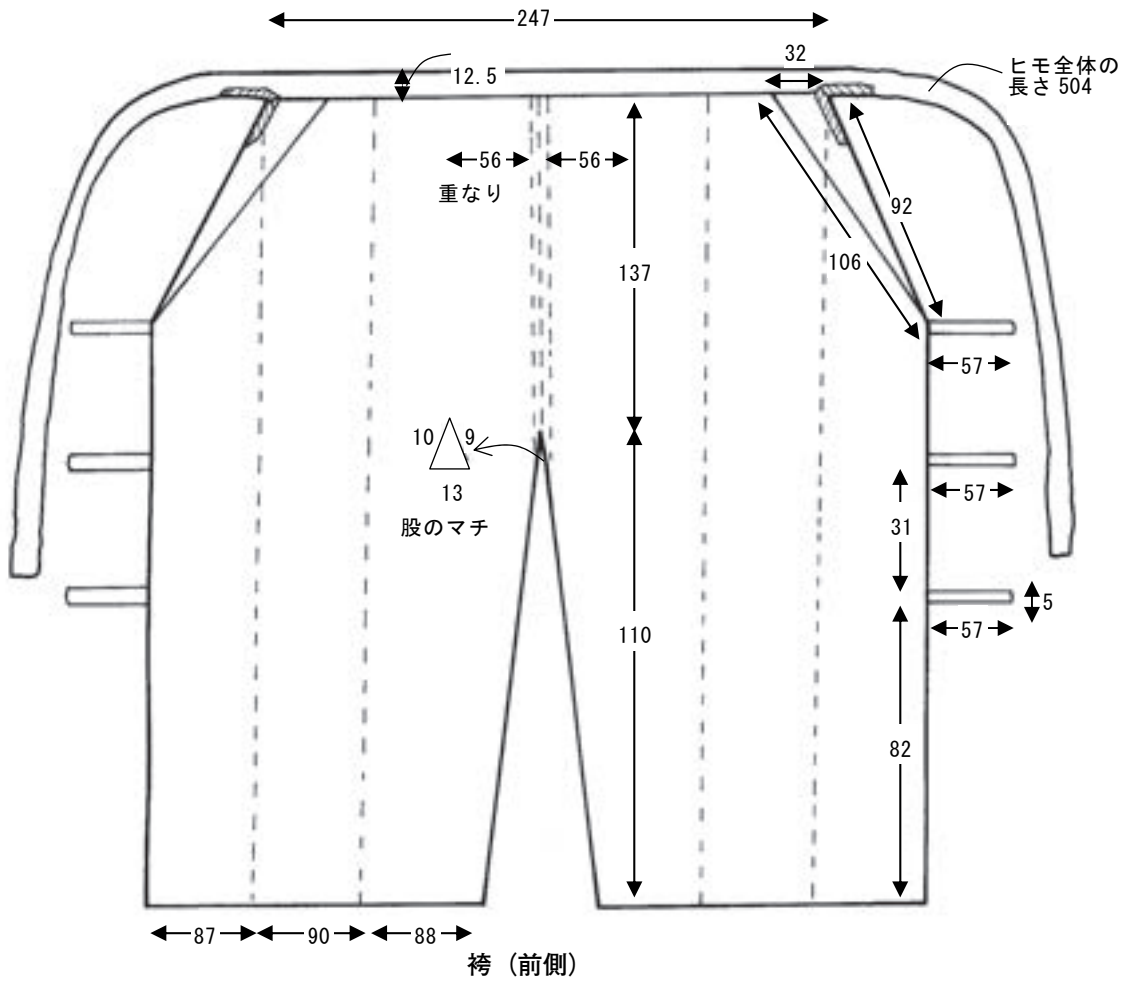
完成 (令和2年9月25日)



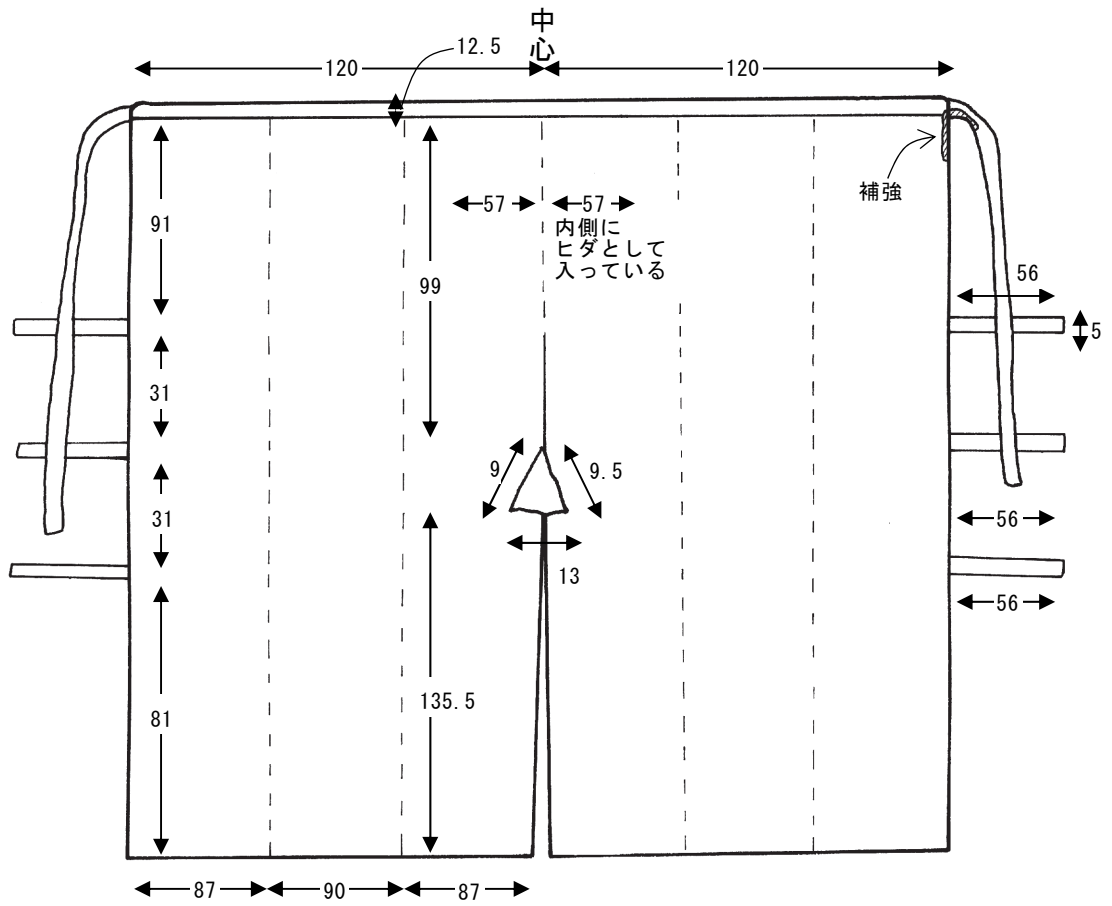
衣装製作風景 (令和2年9月14日)



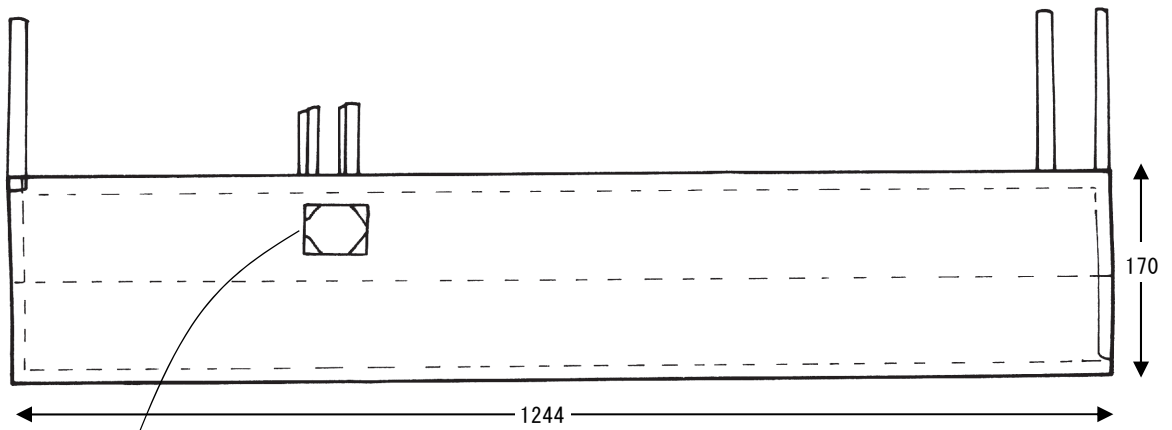
上着



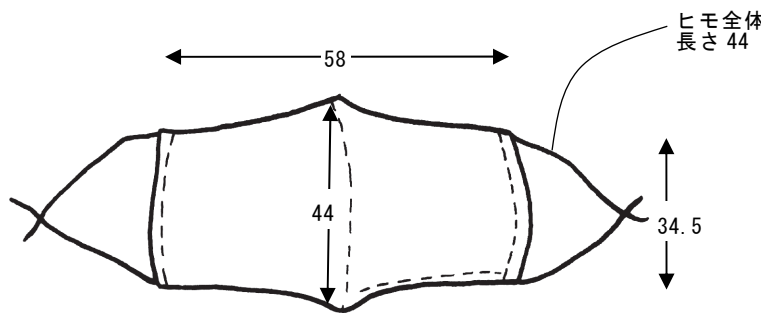
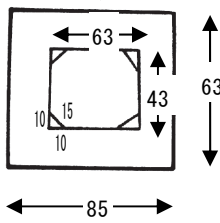
袴 (前側)



袴 (後側)



台車カバー



マスク

## 引用文献

- ・白尾国柱『鹿藩名勝考』巻之五 一七七五年（鹿児島県維新資料編纂所『鹿児島県史料 鹿藩名勝考』一九八二年 鹿児島県）
- ・『三國名勝図会』天保十四年（一八四三）（『三國名勝図会』一九九二年 青潮社）
- ・大隅町誌編纂委員会編集『大隅町誌』一九六九年 大隅町役場
- ・大隅町編纂委員会編集『大隅町誌（改訂版）』一九九〇年 大隅町
- ・村田熙『村田熙選集1 盲僧と民間信仰』一九九四年 第一書房
- ・故実叢書編集部編『小袖の部』『貞丈雑記』一九五二年 明治図書・吉川弘文館
- ・長崎盛暉『新版日本の伝統色―その色名と色調』二〇〇七年 青幻社
- ・志村ふくみ『ちよう、はたり』二〇〇九年 筑摩書房
- ・中島勇三『地名散歩』二〇〇八年 中島勇三

## 参考文献

- ・斎藤正二『植物と日本文化』一九七九年 八坂書房
- ・松下幸子『祝いの食文化』東京美術選書61 一九九一年 東京美術
- ・村上道太郎『萬葉草木染め』一九八五年 新潮社
- ・『三國名勝図会』巻之五十七・巻之三十六 一九八二年 青潮社
- ・『和漢三才図会』18『東洋文庫532』一九九一年 平凡社
- ・島田勇雄校注『貞丈雑記』1〜4 東洋文庫 一九八五年 平凡社

## 第五節 祭礼の次第

岩川八幡神社の祭礼は、歳旦祭から除夜祭までいくつもあるわけだが、ここでは十一月三〜五日の弥五郎どん祭り〜ホゼ祭りに限ることにするが、弥五郎どん祭りを主とする。

なお、一連の神事に關しては、現在は三人の神職で分擔して執り行っている。また、弥五郎どんの組み立てから解体までは、弥五郎青年部（曾於市商工会大隅支所青年部・JAそお鹿児島青年部）が行っている。

11月3日(木)		
0時45分	ふれ太鼓出發神事	斎主：池之上淳一
1時00分	ふれ太鼓出發	
1時30分	弥五郎どん組み立て開始神事	斎主：西秀一
3時30分頃	弥五郎どん御面出し神事	太鼓：西留正昭宮司 後取：池之上・西
4時00分	弥五郎どん起こし	
7時00分頃	弥五郎どん完成 弥五郎太鼓隊安全祈願神事 弥五郎太鼓奉納演奏（1回目）	斎主：西留宮司
9時00分～	本祭受付開始	
9時30分	神幸祭開始 巫女舞：2カ所	
10時45分	弥五郎太鼓奉納演奏（2回目）	
11時00分	御神輿出し神事	斎主：西留宮司
13時00分	浜下り出發	
14時00分頃	御旅所神事 巫女舞	斎主：池之上・西
15時30分頃	浜下り帰着	
15時45分	御帰還神事 巫女舞	斎主：西
11月5日(金)		
10時00分	ホゼ祭り神事	斎主：西留宮司
15時00分	弥五郎どん解体	太鼓：西留宮司 後取：池之上・西

令和4年度弥五郎どん祭りタイムスケジュール

### 一 岩川弥五郎の祭礼

#### (一) 触れ太鼓

三日午前一時直前、触れ太鼓二組の人々が拝殿に上がって、神主からお祓いを受ける。それから、太鼓一つを竿に吊るして二人で担ぐ。打ち手は一人でバチ二本を持つ。「弥五郎どんが起きつど」と叫ぶ人が二人と、



全部で五人が一組となって回る。神社の拝殿から鳥居を抜けての道路までは二組一緒だが、下りてからはお互い反対向きになって、別々に進む。大鼓を叩いて「弥五郎どんが起きつど」と大声で叫ぶ。一緒に叫ぶときもあり、別々に叫ぶこともある。だいたい弥五郎どんが巡る道筋を回っていく。それぞれが一时间ほどかかって、戻ってくる。

## (二) 弥五郎どんの組み立て

組み立てをする人や手伝う人三十人ばかりの人々のお祓いをする。ばらばらに倉庫に始末している胴体や腕を拝殿内に入れる。真夜中に、拝殿内で大きな弥五郎どんを床に寝かせて組み立てるのが、最大の特徴である。浜下り行列は午後一時からなので、夜明けすぐから組み立てても十分間に合うはずである。それを午前二時から行う。まず胴体を拝殿中央出口が足元に、頭を神殿の方へ置く。胴体は鉄骨入りなのでかなり重たい。その鉄骨の円筒（胴体）には縄の結び目がかなりあるが、これは鉄骨が直接竹籠に当って傷がつかないように、クッションとして入れているからである。その胴体の右側に左手を付ける。つまり上を向いている状態で作っていく。両腕が脇に固定され、顔を作り、着物を着け始めると、顔に面を取り付ける。面はお祓いをしてから付ける。両腕は着物の袖を通してから両手を前に合わせるために、曲げないといけない。四年に一回作り直す、初めの内は柔軟性があるので、すぐ曲げられるが、四年目になると、簡単に曲がらない上に、ポキポキ折れてくるので慎重に曲げる。衣を着せ終ると、拝殿から出すが、拝殿から出す時は、そのまま上を向いたまま出せば両腕が拝殿入口より大きいので、斜めにしなければ出せない。まず、拝殿入り口両脇の提灯ははずす。斜めといっても両腕が抜けないので、片腕を出すように斜めにし、一方が出てから、

もう一方を出す、という具合にしないと、出せない。それほど大きい。台車へ取り付ける。鉄骨なので、ボルトで締める。

## (三) 弥五郎どん起こし

四時頃になると、大勢の親子が集まってくる。弥五郎どんを起こすためだ。弥五郎どんの前方には長いロープが二本付けられ、起こしを手伝う人々はそのロープを握っている。十一月三日は場合によっては、気温五度という時もある。皆、期待を込めて待ちわびている。弥五郎どんの後には胴体が倒れないように木で作ったT字の押し棒を三〜四人で押して、サーチライトを拝殿から照らし、合図で「よいしょ」と起こしていく。二分もかからない。あつという間に立ち上がる。歓声上がる。

## (四) 刀などの道具を付ける

人々が帰ってから、鉾・刀・煙草入れなどを付けていく。地上には大きな高下駄やゾウリなど飾る。弥五郎どんの大きさを強調している。全てが終わるのは七時頃である。拝殿左脇に飾っている。午後一時の出発まで、そのまま飾っている。参拝者は今回の弥五郎どんの出来栄を眺めている。

昭和二十一〜二十五年までは刀は差していない。戦後の刀剣統制で、県庁に預けたままであった。

## (五) 境内での芸能

九時、大隅弥五郎太鼓の奉納、九時半、巫女舞・神事、十時半から神社境内で芸能などが始まる。年によって、芸能の内容・種類は違ってくる。太鼓演奏・示現流・太鼓踊・ソバ切り踊・棒踊などである。残念なことに、

令和四年度で大隅町坂元、神牟礼の太鼓踊りがなくなった。高齢化での後継者不足である。大隅半島側は八月踊は多いが太鼓踊は八地区しかない貴重な踊りの一つであった。

境内では、甘酒や豚汁なども八五六杯出しているし、弥五郎シャツ・野菜などの即売もある。八五六杯は「やごろ」うからの語呂合わせである。

#### (六) 弥五郎どんの出発

いよいよ弥五郎どんのお出ましである。岩川小学校五年生男子が弥五郎どんの台車を引く(コースは図の通り)。先頭に弥五郎太鼓が付く↓弥五郎どんの台車(肩には電線などの邪魔になるものを持ち上げる人。台車の周りには警護人)↓大傘↓神主↓神輿↓宮仕↓威儀物(矛・幟など)↓神社役目の人・関係者など。コースの中での見所は橋の下を通るときイナバウアー、斜め後ろに倒す。警護人が支え棒で後ろ側を支える。綱を緩めるためにハンドルを回す。肩乗りの人は乗ったまま、橋下を通過すると、元に戻す。ハンドルを回し、直立する。橋は国道二六九号バイパス高架橋といい、台車の高さを含めていなかったための工夫がイナバウアーであった。

次はバス駐車場へ向い折り返し、御旅所の中央公民館で神輿を置いて、祈禱をする。帰りは同じ道をたどり、右に入って神社を目指す。これを現在では「浜あがり」と言っている。坂を上がることを込めた言い方である。到着すると、しばらくは神社右横へ置いて展示。後、屋根付き展示場へ五日まで展示後、解体して格納する。

#### (七) 武道・芸能大会など

朝九時から剣道・柔道・空手・相撲・弓道・バレエなどが岩川小学校

や各校体育館などで行われる。それぞれかなりのにぎわいである。他にも作品展示やのど自慢や歌謡ショーなどと多彩で、一日中にぎわっている。

#### (八) 八幡神社文化講演会

四日は、特に行事はなく、弥五郎どんが境内に鎮座しているだけであるが、中日にも何か有意義な行事を実施しようということで、第四十二代宮司後藤大志郎氏(当時は権禰宜)の提案により、平成二十五年から八幡神社文化講演会が開催されるようになった。講演内容としては、岩川や曾於市の歴史や文化をテーマに構成されている。

令和二〇四年はコロナ禍のため開催されなかったが、それ以前は次のとおり。

- 平成二十五年『弥五郎どん巨人伝説あれこれ』中島勇三
- 同二十六年『戊辰の役と私領五番隊』澤俊文
- 同二十七年『弥五郎どん祭りくその魅力の謎に迫る』勝目興郎
- 同二十八年『大隅町に残された古文書が語るもの』山下一成
- 同二十九年『市内の明治維新・西南戦争関連の史跡について』加塩英樹
- 同三十年『八幡神とは何かく南九州の八幡神社と八幡信仰』栗林文夫
- 令和元年『伊勢家と岩川郷』澤俊文



八幡神社文化講演会

(九) ホゼ祭り

五日が八幡神社の秋の例大祭である。神事がある。ホゼ（豊穰）を祝うために行われる。

(十) 祭典の式次第

現在の弥五郎どん祭りでは、十一月三日に「ふれ太鼓」・「組み立て開始」・「弥五郎太鼓お祓い」・「神幸祭」・「御神輿出し」・「御旅所」・「御神輿納め」、そして十一月五日の「例大祭（豊祭）」において神事が執り行われるが、その際の祭典式次第は次のとおりである。

- ① 奉鼓 ② 修祓 ③ 齋主一拝 ④ 献饌 ⑤ 祝詞奏上 ⑥ 楽の奉納
- ⑦ 玉串拝礼 ⑧ 撤饌 ⑨ 齋主一拝 ⑩ 奉鼓 ⑪ 齋主挨拶

また、巫女舞は、神幸祭、御旅所、弥五郎どんが神社に帰ってきた時に奉納されている。

現在の楽の奉納は、「神楽太鼓譜」と「山宮神社地頭太鼓譜」の二種類を使用している。どちらを叩くかは、その時々々の神職の判断で、特に決まりはないとのことである。「神楽太鼓譜」については、通常は一番→三番→五番を繰り返して、長くなる場合に適宜、二番と四番を織り交ぜたりしているとのことである。時には、宮司の笛も太鼓に合わせることもある。「山宮神社地頭太鼓譜」は、現宮司である西留氏が、志布志市の山宮神社



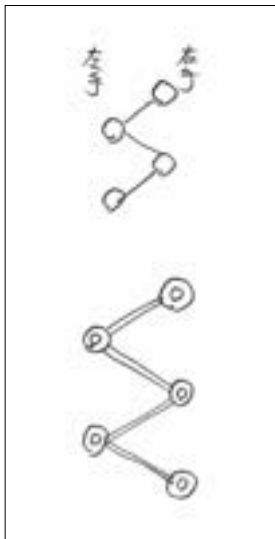
神楽太鼓譜

で習い取り入れたものである。なお同宮司によると、昔、当社において別の太鼓の楽譜を見たことがあるが、現在は所在不明とのことであった。

また、修祓の際の祓詞は左記のとおり。

掛けまくもかしこき伊那那岐大神  
筑紫の日向の橘の小戸の阿波岐原に  
禊祓へ給ひし時に生り坐せる  
祓戸の大神等 諸々の禍事罪穢  
有らむをば祓へ給ひ清め給へと白す事を  
聞食せと 恐み恐みも白す

なお、三日当日は、本殿から弥五郎面を出す時、拝殿から外へ本体を出す時、そして五日に弥五郎面を本殿に還す時に、太鼓を叩いているが、その楽譜は次のとおりである。元々は別の譜を叩いていたが、西留宮司就任後の令和元年から取り入れられている。



弥五郎どん奉遷の譜



山宮神社地頭太鼓譜



## 二 山之口弥五郎の祭礼

### (一) 祭礼日時

岩川弥五郎どんの日にちと同じく十一月三日に行う。十時的野八幡宮での神事。十一時から浜殿下りの準備。十一時半出発。十二時十分弥五郎どんの館での神事。広場で郷土芸能奉納。棒踊・俵踊・奴踊・太鼓踊・棒踊・牛の出る踊（太郎太郎祭りと同じようなもの）など。十四時四十分館で神事。十四時五十分御神幸行列（八幡宮へ帰る）。十五時十分八幡宮で神事。十五時四十分館での直会。

### (二) 浜殿下りの行列順序

- ①獅子二名。②大麻一名神官。③弥五郎どん御神体（富吉児童・氏子）。
- ④御神馬一頭（馬方四名）。⑤神舞二名（巫女）。⑥名誉会長・保存会長・氏子惣代長。⑦来賓。⑧猿田彦二名。⑨御神旗一名。⑩笛一名（神官）。
- ⑪大太鼓三名（一名は神官）⑫浦安の舞四名（巫女）。⑬神楽舞（数名）。
- ⑭御神輿三丁（先頭花木地域女子児童四名・中上富吉女子児童四名・後麓地域女子児童四名）。⑮富吉小子供芸能保存会（男女児童）。⑯各郷土芸能保存会（数十名）。⑰神官。⑱氏子惣代数名。⑲保存会員（数十名）。
- ⑳一般参列者多数。

## 三 飢肥弥五郎様の祭礼

### (一) 祭礼日時

十一月二十三日に流鏑馬と同時に行っていった。令和四年度は十一月十五日であった。流鏑馬は早くからしていない。昔は七歳の弥五郎様を組み立て式台車に乗せて市中を小学生以下の子供たちが引いて回っていたが、令和四年度は、大きな弥五郎様は神社の横の庭に置いていた。鳥

居の前に置いていた時に、風が強く吹いて、一度倒れて、面が割れたことがあった。事故が心配なので令和三年から神社横へと変わった。小弥五郎様を軽自動車に設置して、市中を回ることになっている。小さな弥五郎様と言いつつながら電話線に掛かるので、電話線持ち上げ用の上部にU字型の竿持ちが付いて上げている。大・小弥五郎様は朱塗りの面・白ひげ・烏帽子を付け、紫色の着物に朱色の袴、長刀一本、右手に槍を持つ。胴体は補修しながら使っているが、あまり壊れないので、十年以上は使っている。



弥五郎様の下部をボルトで固定する

### (二) 小弥五郎様の製作

現在は二台のクレーンを使って、立てたまま作業する。大弥五郎様も小弥五郎様も立てたまま作業する。まず大弥五郎様の方は台車（ハマ車輪）と弥五郎様の股の部分に乗せる高い台形を組立てる。特にハマは動かないようにする。固定が終わると、全体の竹組の弥五郎像（これは出来上がったもの）を台車に乗せるが、大きいのでクレーンが上部を支えて（吊り下げて）、もう一台のクレーンが後ろからバケットで押して、台の中央に乗るようにする。台に乗ったら足の方を縄で括り付ける。固定が完全になったら、白い衣装を被せ、次に紫の上着、朱色の袴を着せる。それぞれマジックファスナーで簡単に留める。次に面を付ける。こちらの面は割れ目を繋いだ方の面であるが、高いので下からはちゃんとした面に見える。次に左腕に刀を付けて肩に腕の紐を結び付け、鏝をはめる。次に槍は右側に。全てクレーン車のバケットに乗って作業する。小弥五郎の場合は、軽トラ

の荷台に小弥五郎様の台部をネジで固定したのち、大弥五郎様と同じ工程で作り上げる。面や腕は合成樹脂なので軽い。大弥五郎様の方は夕方六時から二時間ほど。小弥五郎様は雨が降ったので、翌日朝出発前に、もっと短く一時間ほどで終わる。岩川弥五郎は神秘的な組立方だが、飢肥弥五郎様は合理的な組立方である。

昔は、大弥五郎様を立てるのに一日中かかった。寝かせて作っていたので、最後に立てる時は、大変で、後に綱を付け、鳥居を利用して、鳥居の上から綱を渡して引張る。前の方はハシゴで押し上げて、立てていたという。

### (三) 前夜祭

初めに神事が一通りあり、神輿を出す。その時は獅子舞全員で出すが、その時は話をしてはいけないうし、息をかけてもいけないので、口に柿の葉一枚を口に噛んでいる。最後に戻す時も柿の葉を噛んで戻すため、二回使うので、袋に入れて懐に持っている。お祓いの後、雌雄の獅子舞が踊る。雄は緑系、雌はピンク系の装束である。

### (四) 当日の朝

六時頃、社務所に赤飯と一年前の御幣(床用の幣・水神幣・荒神幣【火の神】・高幣)などを持って来て、お祓いをしてもらい、新しく変える。古いシベヤや注連縄類は、神社下階段を下り、神社に向かって右手にある四角い石囲いで焼く。赤飯は大部分神社側が受取り、握り飯にして、弥五郎様巡行の時の昼食にしていた。今は赤飯が少ないため、仕出し弁当に変わっている。

### (五) 行列順序

先頭には獅子舞(一人入り)が二組↓小弥五郎様(軽トラックに乗せる)↓神輿など、子供たちがにぎやかにはやしながら回っている。最初は先頭に獅子舞が四辻の中央で自動車などの通行を止めて舞う。四か所舞ってから、小弥五郎様とその後の神輿が二手に分かれる。そして、今町公民館の御旅所(休憩所)で弥五郎様を引いていく子供たちにお菓子やミカンなどを振舞う。そこに神輿行列が再び一緒になって、第二の御旅所である板敷公民館を目指して出発する(昼食も兼ねる)。要所々々で獅子舞は舞い、頭を噛む。噛むときは、一回カンと音を出してから、そろっと頭を噛む。獅子舞を舞う人は、親指と小指を強く使うために、痛いので白いテープを巻いている。巡幸が終って神事をした後に、大弥五郎・小弥五郎様の解体となるが、昨夜の雨で衣装がぬれているので、その日になるか明日になるか、ということであった。



自動車を止め四辻で舞う獅子



神輿の出し入れに噛む柿葉



獅子舞の親指と小指に絆創膏

### 四 三か所の弥五郎の比較

#### (一) 顔

山之口弥五郎は赤い顔に黒ひげ、飢肥弥五郎も赤い顔に白ひげ、烏帽子。

岩川弥五郎は白い顔に黒ひげ、頭に鳥のような飾りと兜巾みたいなものが突き出している。

(二) 背の高さ

山之口弥五郎は四尺。飢肥弥五郎様は七尺。岩川弥五郎は四・八五尺。

(三) 竹の六つ目編み

網目が大きいのは飢肥弥五郎、次に山之口弥五郎どん・小さいのは岩川弥五郎どんの順。小さい方がガツシリしている。

(四) 着物

山之口・白い麻衣。飢肥・紫色の衣に朱色の袴。岩川・茶色の衣に茶色の袴。

(五) 持ち物

山之口・岩川は腰に大小二本、飢肥は腰に長刀を一本差す。手には、山之口は何も持たないが、頭の後ろから三つ又の矛が突き出ている。飢肥は右手に槍をもつ。岩川は中央に両手で鉾を持っている。

(六) 獅子舞

山之口は一人入りの獅子が二組で先頭付近にいて、人の頭を噛んで回る。飢肥は二人獅子二組が先頭で、主に道路の四つ角で舞う。頭も噛む。岩川には獅子舞はない。だが、昭和二十四年の写真には、面だけが二つ写っている。獅子舞があったかは不明。

(七) 台車

昔は全て木の台車であった。山之口は現在は完成した造り付けの木の台車に乗せている。飢肥はいまでも組み立て式で、クレーン車で立てて造る。町を巡る軽トラックの小弥五郎様も立てたまま、クレーン車で造る。岩川は今では自動車のシャーシーを使っている。その前は組み立て式の木の台車であった。

(八) 催し物

山之口では盛大な地元の芸能を行う。飢肥は剣道大会と四半的を行っていたが、今はコロナの関係で両方とも中止している。岩川は盛大な武道に芸能・文化祭などがある。

(九) 地域の祭りに対する意識

山之口は弥五郎の館があり、弥五郎の関係の物を展示していて、いつでも自由に見学できる。飢肥には弥五郎関係の施設はない。岩川は弥五郎の大きな銅像が立っていて岩川の町を見下ろしている。どこからでも見上げることができる。弥五郎まつり館もあり、弥五郎の像や弥五郎どんについてのパネル展示がある。かつては映像を活用して祭りを疑似体験出来るコーナーもあったが、今は無い。子供の頃「籠を見ると腹がいたくなる」「籠と言ったらいけない」と言われた。

本や弥五郎関係グッズにお菓子や焼酎まで揃えている。令和四年ではそれまで二年コロナで休止していたので、兼ねては焼酎も一本だったが三本に増えていた。

## 第六節 浜下り

### 一 浜下りとは（定義）

岩川で言う「浜下り」は、弥五郎どんを先頭の御神幸行列のことである。別に「浜」という海岸へ行くわけではない。大正二年以前、旧八幡社の時は川辺へ行っていた。

一般に「浜下り」を「浜おれ」とか「浜どん下り」という場合は、特に三月の大きく海の潮が引き、浜辺で貝や魚や海藻などを住民が取って、潮で身を清めることである。浜遊びでもあった。南九州から奄美や沖縄まである。「浜おれ」に行かないと「フになる」とか「フクロウになる」などの言い方がある程、重要な行事であった。「フ」とは、臭いにおいを出す「カメ虫」のことである。



元八幡時代の御旅所  
(前川と菱田川の合流点)

御神幸で海岸へ行くのは、力が弱まった神が浜で新たに力を得るためのものである。一年に一回、つまり毎年、神社の都合で、月日は別々である。中には、六年に一回、十五年、三十年、七十二年に一回（茨城県かまき金砂大祭礼では「磯出」という）などの御神幸を行う神社がある。理由はわからない。

岩川では、「浜下り」といい、最近では帰りを「浜あがり」と言っている。たぶん、下の道路から、登り坂を上がって神社へたどり着くからであろう。

ちなみに博多の筥崎八幡宮では帰りを「お上り」と言っている。

### 浜下りと弥五郎どんの始まり

元八幡の明和の時代（一七六八年）の弥五郎どんは、前田川と菱田川の合流地点まで一町（一一〇間）まで行った、とある。弥五郎どんは現在より大きい四尋（一尋を一・五間として六間）で、車（台車）に乗せている。腰の刀は九尺五寸（一尺を三三センチとして、三・一三メートル）・脇差は七尺五寸（二・四七メートル）である。現在、背丈が四尺七五センチと小さくなっているのは、昭和十五年に鳥居を石に変えた。ところが、鳥居をくぐれないために低くしたようだ。昔の木の鳥居は七尺あったからである。【神社誌下】

寛政七年（一七九五）頃では、大きさ一丈六尺七寸（一尺を三三センチとして、五・五一メートル）と明和のころよりやや小ぶりになっているが、単位が違うので、実際は同じなのか、違うのかはつきりしない。【麿藩名勝考】

天保十四年（一八四三）では一丈六尺とあり、七寸を省略したのかはわからないが、次第に低くなっているようだ。【三国名勝図会】

それでも、背は高い。

背が高いだけでなく、胴回りも大きいので、最初から台車に乗せているし、面も付いている。着物も最初から梅染めであったのだろう。

この形式は山之口の弥五郎どんと似ているので、山之口の野正八幡宮の弥五郎を参考にして作ったのであろう。それで、台車や人形を竹で作る、面があり、刀を二本差している、着物を付けているなど、よく似ている。

### 二 放生・放生池の問題

放生というのは、捕まえた生物を池や川・海に放すことで、幸せや長命を願うために行うもの。石清水八幡宮では、旧暦八月十五日（現在新

曆九月十五日)に行っている。台湾や中国南部では五月五日に行く。鯉・金魚・石亀が多く、寺や廟には放生池(今はプールのように長方形の池も)があり、鯉が泳ぎ、石亀は岩の上に甲羅干しをしている姿がみられる。中国山東省青島市の廟(寺か)では旧曆一月元旦に詣でるが、放生のためとして、金魚を売っていた。

和歌山の粉河寺では放生池はあるが、生き物は見られなかった。現代では、放生の行事は宇佐八幡宮や宮崎八幡宮・興福寺などで行われているが、規模や日時はそれぞれ違うようだ

弥五郎どんの浜下りは、放生とは言えないのでなからうか。

「ホゼ」と呼ぶ場合は、農作物の豊穰(ホウジョウ)を祝う行事であり、本来の放生会とは別である。

浜下りも海から遠い場合は、川や池の場合が多いし、わざわざ池を作る場合が多い。金砂大祭礼の場合は、往復七五<sup>キ</sup>を一週間かけて海まで、往復している。

岩川弥五郎どんは最初は川岸まで行っているが、現在地へ移ってから、川岸まで行っていないのではなからうか。

山之口弥五郎の場合は、近くに池があるようだが、実際には、池まで下っていないようであるし、飢肥弥五郎様は、昭和六十三年頃から小弥五郎様をトラックに乗せて、街中を巡っている。

三方所の弥五郎どん(様)は、だんだん水辺から離れてきたようである。

### 三 浜下り神事の引き手・御旅所の変遷

現在の弥五郎どんの浜下り神事では、曾於市大隅町内の小学五年生男児が引き手となっている。引き手は従来四〜五十人程度必要で、弥五郎青年部がサポートしながら、浜下り神事を行っている。

元八幡時代や明治・大正期は資料がないため不明ではあるが、戦後から昭和三十年代の頃は、馬場(東馬場・上馬場)の氏子青年らが引き手となっていたようである。昭和三十八年には「岩川小の御旅所まで子供に引かれ浜下りした」とあり、この頃は上馬場と東馬場の小学五年生男児だけが引き手を担っていたようで、まさに地元に住む人たちの特権であつたともいえる。なお、中園の澤俊文氏によると、昭和四十二〜三年頃から女性も引き手として参加出来るようになった(対象者は岩川小学校五年生(三クラス)だが、希望者が多く抽選であつた)という。その流れは、昭和五十年代までは続いていたようで、浜田文宝堂の平原淳子氏によると、当時馬場に住んでいた同級生の女性(昭和三十九年生)は、親子三代(祖父・父・本人)で参加したと聞いているとのことである。

その後、いつから岩川小学校五年生男児のみが引き手となったのか明確な資料は確認出来なかったが、少なくとも平成初期にはそのようなになっている。その後、人口減少に伴い引き手の確保が難しくなり、平成十一年に大隅町内の五年生男児にも協力を呼びかけるようになり、現在に至っている。

御旅所について、現在は大隅中央公民館敷地内を御旅所と見立てて神事を執り行っている。(祝詞は二二五ページ参照)

元八幡時代は、前川と菱田川の合流点を御旅所と見立てていたようである。現在地に移転した直後は何処が御旅所であつたのか不明であるが、昭和五年の鹿兒島新聞によると、この当時は岩川小学校校庭まで浜下りを行い、そこで御旅所神事を行っていた。昭和二十三〜二十八年頃は、神社から馬市場の広場(JA横の陸橋付近)へ行き、そこで神事を行い、夕刻に神社に戻っていた。同二十九年は、岩川町制三十周年ということもあり、馬場通りから本町通りへ練り歩いたが、同三十一年からは、再



び神社から岩川小学校までの浜下りに戻っている。

同四十三年、大隅町中央公民館（現大隅中央公民館）開館を機に、同所が御旅所に設定され、再び巡行が岩川市街地まで執り行われるようになった。またこの頃は中央公民館に一泊し、翌六日に神社に戻っている。

この頃の浜下りのコースは、神社→岩川小（第一御旅所）→郡畜産連前→町役場前→鹿児島交通バス駐車場で折り返し→中央公民館（第二御旅所・宿泊）→大隅合庁前→岩川小（武道大会を見学）→神社である。

同四十七年までは五・六日が祭りの開催日であり、翌四十八年から三・四・五日に開催日変更となったが、巡行ルート【図1】はそのまま同五十年まで継続される。

同五十一年は、宿泊を取り止め、三日は起こし神事のみで、四日に日帰りで浜下りを実施している。

同五十二年からは、午後から浜下りを開催（但し、平成四十二年は、浜下りは午前十時の開催）し、巡行ルートはほぼ現在のスタイル【図2】となっている。

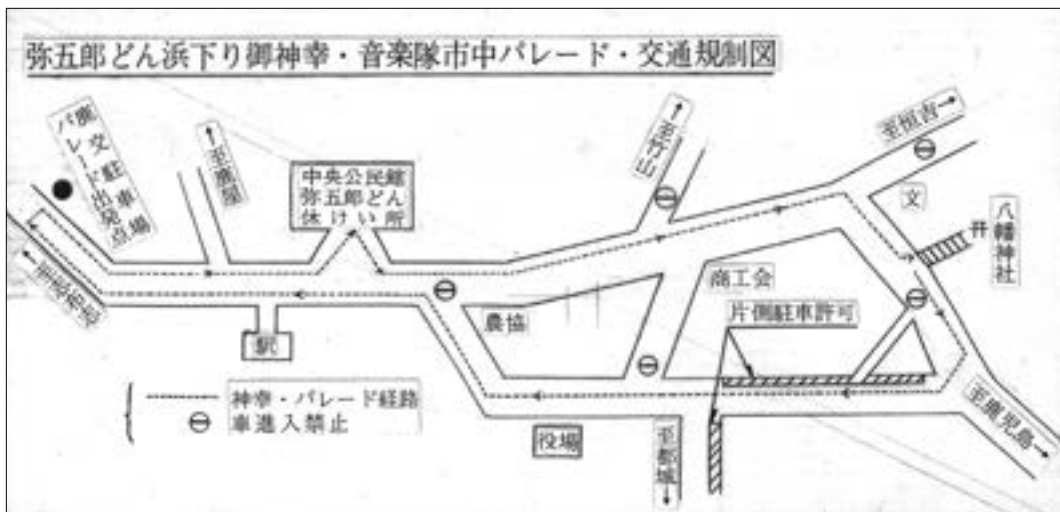


図1 昭和47年11月5日の浜下りルート

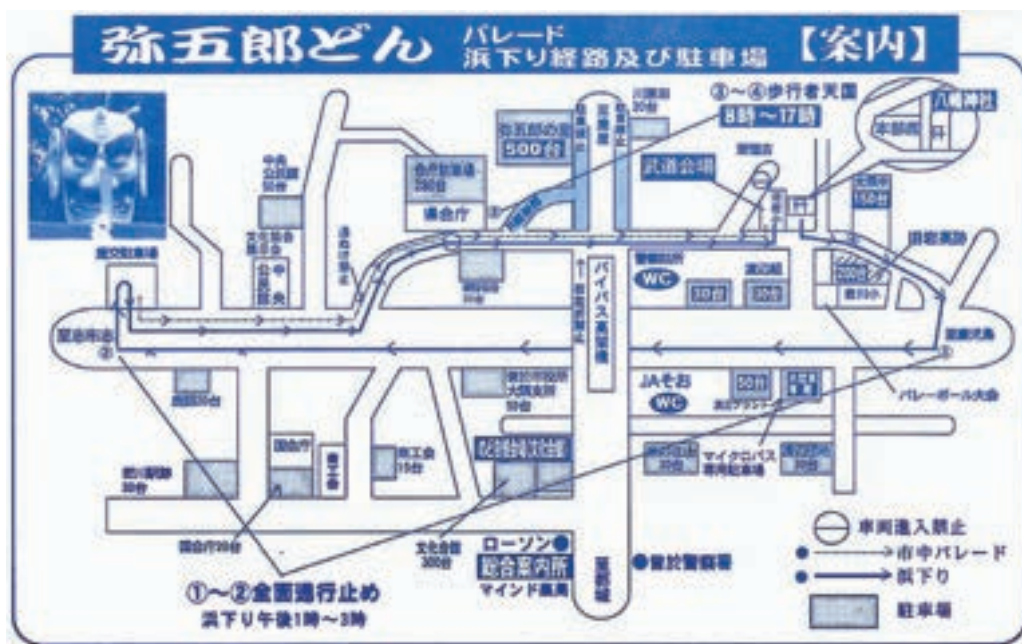


図2 現在（令和4年）の浜下りルート

## 第七節 例祭

### 一 例祭について（秋季例祭）

日時 十一月三日から五日

十一月三日は弥五郎どん祭り

十一月四日は中日

十一月五日はホゼ祭り

### 二 十一月三日弥五郎どん祭り本祭

弥五郎どん起こしの神事が午前一時、フレ太鼓と共に始まる。「弥五郎どんが起きつど」と町中に触れ回る。

フレ太鼓が発すると同時に弥五郎どんの本体組立てが始まる。顔・頭にサラシを巻き、その上から衣装と同じ布を巻く。身体に腕の部分をはめ上衣を着せる。弥五郎どんが大きいので衣装を着せるのは大変である。片腕ずつ袖を通し上衣を着せるのであるが、腕を胸の前で組むように作ってあるので、なかなか袖を通すのが大変である。



ふれ太鼓



組み立て

衣装着せの大部分の時間を両腕に袖を通すことに費やされる。袖に両腕が通ったら前身ごろの胸を合わせて着せ付けは終了する。

同時に顔に面付け作業も行われるので午前三時三十分になったら、拝殿で太鼓を打ち面出し神事が行われ神殿から面が出される。神事が終わると面付け作業が始まる。面と山鳥と山鳥の尻尾を頭の所に取り付ける。大きな面であるから歪んで取り付けないように、一人の人が本体の胸のあたりに乗り、面付する人とやり取りしながら面をつけ終える。

午前四時「弥五郎どん起こし」で拝殿から弥五郎どんの肩を斜めにして出し弥五郎どんに綱を付け、弥五郎どん起こしを見に来ていた近隣の人々や見学者・弥五郎どん祭り関係者が一緒になって綱を引き弥五郎どんを起こす。



拝殿から出る弥五郎どん



弥五郎どん起こし

午前六時、弥五郎どんが台車の上に立ち上がる。

この弥五郎どん起こしに参加すれば身体が強壮になり、運気が益々めでたくなるという、言い伝えがあるので大勢の人々が夜明け前から参加する。



弥五郎どんが起きた後、さらに袴を着せさらしを巻き、太刀・煙草入れ・印籠などの諸道具を身に付けさせる。境内の隅ではもてなしの甘酒や豚汁が皆に振舞われる。



組み立て風景（さらし巻き）



甘酒の振る舞い

の本体に使ってあった竹を利用している。



弥五郎太鼓奉納（1回目）



弥五郎太鼓奉納（2回目）

## （二） 午後の神事

・浜下り

コロナ禍で令和二年十一月三日の浜下りは、岩川小学校五年生の男児たちの手に引かれて境内から岩川小学校校庭までの短い距離の浜下りとなった。

例年岩川小学校の五年生が弥五郎どんを引くことになっている。

令和四年は久しぶりの弥五郎どん祭りです。弥五郎どんも浜下りに出かけることになったので、神社境内から岩川小学校五年生の男児に引かれて長い坂道を下り市中を御神幸して回った。道路沿いには多くの人々が早くから詰めかけ、弥五郎太鼓に合わせて大きな弥五郎どんの久しぶりの浜下りとなった。

## 三 十一月四日 中日

この日は参拝者が訪れ、弥五郎どんの前で写真撮影などを楽しむ。

## （一） 午前中の神事（例大祭）

・神事（祝詞奏上・巫女舞）

巫女舞は中学生から高校生の六人で、その中の二名が拝殿で舞い、四名は「豊栄の舞」を境内に笹のついた竹と注連縄に御幣を付けた舞庭を設えてあり、そこで舞う。

・弥五郎太鼓奉納（子供太鼓・大人太鼓）

鬼面を付けて太鼓を打つ。横笛一人。太鼓（中太鼓も含む）のバチは竹製（カラタケ）で、この竹製のバチは古い弥五郎どん



巫女舞





参拝に訪れた園児たち



参拝に訪れた児童たち



直会（なおりい）風景



直会での食事

四 十一月五日 岩川八幡神社の例大祭・ホゼ祭り

解体作業

午前一〇時から岩川八幡神社の例大祭が行われ、正午から直会なおりいが行われる。



例大祭



氏子総代・宮司記念撮影（令和2年）

その後、午後三時から弥五郎どんの解体作業が手順よく行われる。集まった弥五郎青年部に対して、お祓いを済ませた後、順次解体作業が行われる。弥五郎面や衣装を取り外し、衣装や諸道具なども元あった状態に丁寧に後片付け作業が行われる。拝殿内では、氏子の人々がさらしを巻くなどの片付け作業を行う。  
令和二年は同時に古い本体のお焚き上げも行われたが、令和四年にはお焚き上げは行われなかった。  
令和四年はコロナ禍と弥五郎どんが久しぶりに浜下りに出かけたという、大きな流れの中での解体作業であったが、それぞれの分担で手際よく行われた。



解体作業前のお祓い



片付け作業



解体風景



解体風景



お焚き上げ



本殿に還る弥五郎面

## 第八節 宮仕と祭礼具

### 一 神社組織と弥五郎どん浜下り

#### (一) 神社組織

令和四年の岩川八幡神社神職は、宮司西留正昭、神主池之上淳一・西秀一である。旧岩川町在住の住民（令和四年は一七三三戸）はすべて岩川八幡神社氏子で各地区から選ばれた方が氏子総代（十九人）となる。神社の諸費用に充てる協賛金（初穂料二戸八百円）は氏子総代が徴収して納める。氏子は、十一月五日の例大祭（ホゼ祭り）後に神社からお札を頂く。氏子総代は五月総会・六月三十日大祓い・弥五郎どん祭り準備や片付け・浜下り行列への参列・年間を通しての神社内外の清掃・年始の反省会などの諸行事に参加する。氏子総代は四班に組織され、責任役員を五名選出（うち一名は宮司）し、神社運営協議や神社祭典に参列する。現在の責任役員は一班鮫島鶴良、二班宮本清明、三班山下清三、四班赤松正志である。責任役員の中から氏子総代会長が決められる。令和四年氏子総代会長は赤松正志である。責任役員と総代の任期は三年となっている。神社の祭祀を助ける役（世襲）の宮仕（ミヤダチ）がおり、平成二年（一九九〇）『岩川（旧郷社）八幡神社由緒記』には十家が記載されている。令和四年の弥五郎どん祭りには五家七人が関わった。

#### (二) 弥五郎どん浜下り

##### ① 神事

令和四年弥五郎どん祭りの神事は、午前一時「触れ太鼓出発神事」（斎主神主池之上、商工会青年部六名参加）、一時半「弥五郎どん組み立て開始神事」（斎主神主西、商工会青年部二十四名参加）、三時半「弥五郎



どんお面出し神事（齋主宮司、後取は神主二人）、四時「弥五郎どん起こし（花火合図、約百名ほどの住民参加）」、八時半「弥五郎太鼓隊安全祈願神事（齋主宮司、隊員三十三人参加）」、九時半「本祭（齋主宮司、後取は神主二人、関係者約五十名参列、巫女舞奉納）」、午後一時「浜下り出発（花火合図、ご神幸は池之上・西神主二人）」、十四時「御旅所神事（齋主池之上神主、後取は西神主、宮仕七人、巫女四人、氏子総代七人参列、一般住民にも参列を呼びかけ三名参列）」、午後四時「弥五郎どん還御式（齋主西神主）」。祭事の齋主・後取・太鼓などは神職が分担して行い、「本祭」と「神輿出し神事」は宮司が齋主として執り行った。進行係典儀は氏子総代から選ばれた責任役員が行った。



御旅所での神事

② 運営

弥五郎どん浜下りの弥五郎どんを引くのは馬場集落の人達に限られ、馬場以外の他集落の人達は引けなかった。浜下りは、昔は馬場の子供たちだけの特権であった。昭和三十三年までは馬場集落青年団が浜下りを取り仕切っていた。昭和三十四、五年から青壮年を含めた馬場同志会が運営を担い、三十六年から馬場と森園を合わせた麓地区青壮年会が弥五郎どん浜下りの母体となった。昭和四十一年から大隅町商工会青年部に浜下りの運営を任せるようになり、現在は、商工会青年部だけでなく農協青年部などの地域若者たちも加わり名称変更した「弥五郎青年部」が運営母体となっている。平成二十二年八月二十日に商工会を母体とした「弥

五郎どん保存会」が結成され、弥五郎どん祭り前夜祭・のど自慢大会・弥五郎どん市中パレード・武道大会など一連の「弥五郎どん祭り」は、実施されている。

③ 行列順と諸役

昭和六十二年（一九八七）、浜下り行列は、弥五郎・大傘・大麻・太鼓・神輿・威儀物の弓・神社旗や天狗旗・日月旗などの順に行進し、弓・神輿・旗などは宮仕が奉持していた。（左図）

1	中丸兼雄	68	男	神官	投谷八幡	大麻役（助勤）	
2	傭（その都度）		男			荷太鼓	
3	川畑龜之助	79	男	神官	桂	太鼓	
4	最勝寺 篤	81	男	神官	西鍋	笛	伶人
5	緒方 博	38	男	宮仕	末吉町向江	猿田彦	大工
6	徳永菊雄	51	男	宮仕	東馬場	日像旗	精米機
7	永田良一	39	男	宮仕	松田	月像旗	農業
8	宮本清明	52	男	宮仕	平原	壺胡録	公務員
9	有川貞弘	86	男	宮仕	東馬場	平胡録	無職
10	西留正昭	43	男	宮仕	西山	神社旗	公務員
11	颯川勝英	65	男	神官	都城市鷹尾	前行	
<div style="display: flex; justify-content: space-around; align-items: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">             ⑬ 神輿 ⑭           </div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">             ⑫ ⑮           </div> </div>							
12	津留辰矢	52	男	宮仕	岡別府	神輿	商業
13	久留治夫	56	男	宮仕	岡別府	神輿	農業
14	西山静雄	69	男	宮仕	西山	神輿	農業
15	岡留徳馬	54	男	宮仕	岡別府	神輿	会社員
16	山口長森	78	男	宮司	西中菌	(役員)	
17	有村光博	84	男	役員	中園		無職
18	八木 忠	74	男	役員	梶ヶ野		農業
19	池之上正雄	71	男	役員	新田場		農業
20	山口恒春	72	男	役員	河原		無職

以下役員 総代 崇敬者（現在 10 人位）毎年はしない

昭和 62 年浜下り行列の順番

令和元年（二〇一九）、浜下り行列は、弥五郎太鼓隊（約三十人）、弥五郎どん（引き手小五年生四十数人・青年部員十数名）、大傘（一本、青

年部二人)、大麻役(宮司)、太鼓(神官一人)、威儀物弓矢(宮仕二人)、神輿(宮仕四人)、神社名旗(一本、氏子総代)、日月旗(二本、氏子総代二人)、天狗面(二本二人)、鉾付旗(四本、四人)、巫女(六人)の順であった。

令和四年(二〇二二)、浜下り行列は、弥五郎太鼓隊(総勢三十三人)、弥五郎どん(綱引き役の小学五年生男子四十名、弥五郎付き添い役の弥五郎青年部十数人)、大傘一本(傘持は青年部員三人、傘は破損していたので開かずに肩に担ぐ)、大麻(神官)、太鼓(神官)、巫女(四人)、威儀物弓(宮仕二人)、神輿(台車に乗せ、宮仕四人が担ぎ棒に巻いた白布を引く)、神社名旗(二本、氏子総代)、矛付き日月旗(氏子総代二人)、矛付き比礼旗役(氏子総代二人)、矛付き天狗面(氏子総代一人)。

矛付き旗類や巫女の行列順は年度によって変わったりしている。以前は太鼓の横に太鼓荷車役がいたが今は神職が太鼓車を押しながら太鼓を叩く。宮仕が奉持していた神社名旗、日月旗、比礼旗、天狗面などの旗類は地区氏子総代が代わって奉持している。在住宮仕の減少による御神幸隊列の順番変化は今後も予想される。

#### ④ 弥五郎太鼓

行列の先頭は、大隅弥五郎太鼓隊(令和四年は、中太鼓・小太鼓・笛・鉦など総勢三十三人)が進む。弥五郎太鼓隊は昭和五十七年に結成された。隊員は当初商工会青年部員であったが、現在は同好の人たちも加入し人数も増えてきた。太鼓隊創設時はトラック荷台に太鼓(中太鼓六鼓)を乗せて、弥五郎どんの後から巡行していた。

令和四年は午前八時半に神殿で「弥五郎太鼓隊安全祈願神事」を行い、其の後境内で奉納演奏をした。奉納太鼓演奏は末吉熊野神社の鬼追い太

鼓の演舞を取り入りて大太鼓や中太鼓の奏者は鬼面を被り勇壮に太鼓演舞を行う。弥五郎太鼓隊は浜下りの先陣を切って進行する。弥五郎どんが高架橋(昭和五十九年三月完成)の下を横断する際は、弥五郎どん太鼓隊が見せ場を派手に演出する。後方に傾きながら高架橋下を横断する弥五郎どんの姿をイナバウアー(二〇〇六年流行大賞、トリノオリンピック優勝)の荒川静香選手のショートプログラム演技)と言う人もいる。弥五郎どんの足元に賽銭箱が設けられるが、大隅弥五郎太鼓隊への寄付のほうが多い。

#### ⑤ 弥五郎どんの引き手と守人

浜下りで弥五郎どんを引くのは岩川地区馬場集落の人達に限られており他集落の人達は参加できなかった。昭和四十二年頃までは上馬場と東馬場の岩川小五年生男子だけが引いていた。平成四年から岩川小学校五年生男子が引き手となった。町村合併を機に平成十七年からは旧大隅町内五年生男子に拡大された。

弥五郎どんの左肩に棒を持つ青年(守人)が立つ。守人は持った棒で弥五郎どん進行の邪魔となる電線等を払う。浜下り巡行の前日に電線を切っていた時代もあった。守人は弥五郎どんの肩を左右に揺すり、威風堂々と巡行する様子も演出する。



弥五郎どんと守人

#### ⑥ 縮小浜下り

令和二年・三年はコロナウイルス流行の為に弥五郎どんを神社から岩

川小学校校庭までだけご神幸させるといふ「縮小浜下り・もどき浜下り」が実施された。これは、実行委員会に「この年に当たる小学校五年生だけが弥五郎どん祭りに参加できないというのは忍び難い、子供たちの為にもやるべきだ。」等の声が寄せられたからである。令和三年は、通常と同じ早朝時間に「触れ太鼓」や「弥五郎どん起こし」が行なわれた。午前八時に「弥五郎どん浜下り」が開始され、岩川小学校までご神幸を行い、午前九時に帰着した。この日は、十二時から「お神輿出し神事」をして十四時から「新型コロナ終息祈願祭」も行なった。十六時から「お神輿納め神事」を行い「巫女舞」も奉納もされた。十一月五日まで神社境内に立っていた弥五郎どんは「秋季例大祭（ホゼ祭）」後に解体された。

## ⑦台車

牛に引かせていた時代や大八車、木製台車（ダシゴロ）の時代もあったが、昭和四十五年に木製四輪台車から中型トラックシャーシに乗せる台車に変わった。トラック台車の上に乗った竹編み胴体の中には鉄骨が組み込まれており、「弥五郎どん起こし」で胴体と台車はつながる。現在の台車は平成二十年に更新したものである。車にはハンドルとブレーキが付いており制御役の運転手一人が乗っている。弥五郎どんの周りに、弥五郎どん青年部員が付いており進行操作等の手伝いをする。

## 二 浜下り祭礼具

### (一) 大傘

弥五郎どんの後方に続く大傘は商工会青年部員二人が交互に奉持する。現在は二本目の傘である。一本目が古くなったので曾於市出身者で福岡在住の方が北九州市の祭礼具店（当時大傘を商う九州唯一店）から購入

して寄贈したものである。大傘立て支柱に、奉納、平成二十三年十月吉日と書かれている。

大傘は雨や日よけの為の道具ではなくを弥五郎どんを権威付けする為の象徴的道具である。弥五郎どんの後方で、弥五郎青年部の二人が交代しつつ奉持する。令和四年は傷んでいた為、傘を広げずにたたんだまま担ぎ巡行した。

### (二) 威儀物

岩川八幡神社の威儀物弓矢は、昭和五十年の創建九百五十年大祭時に発足した奉賛会事業の一環として京都の神社祭礼具専門店から購入したものである。

威儀物とは、参列する武官が儀式の威容を整えるために捧げ持つ弓矢などの武具の事である。弥五郎どん浜下りでは、弥五郎どんの後方でやなぎい付きの弓矢（壺胡籙つぼやなぎい）と平胡籙の二本）を宮仕が奉持する。弥五郎どん浜下りでは威儀物弓矢は神輿よりも前に歩く。令和四年のご神幸でも弥五郎どん・大傘・大麻・太鼓・巫女・威儀物・神輿と続いた。威儀物弓矢が神輿の前方を進むのは今も変わっていない。威儀物奉持役は宮仕集団の先頭を歩く。弓矢は宮仕の中の年配者が奉持する事になっている。



威儀物

### (三) 神輿

弥五郎、大傘、大麻、太鼓、威儀物の後に神輿（神輿車に乗せ、担い



棒に巻いた白晒布を宮仕四人が引く）が神幸する。この神輿は、金箔朱塗りで鳳凰冠を頂く。昭和五十年の創建九百五十年奉祝大祭事業で京都松島屋から購入（百三十万）したものである。肩に担いでいた時もあったが、神輿担ぎ役は宮仕だけと決まっており、身長差などで担ぎにくかった事や重くて紋付き肩部分が破れたりした事等があったので、昭和六十年頃に永田良一氏が台車を作り神輿を乗せる事にした。神輿担い棒には白布晒布を巻き、その布の先端を握って神輿を引く。神輿には直接触れない。元から神輿担い棒の位置は決まっている。前の右側が津留・前の左側が久留・後方左側が西山・後方右側が岡留家である。



神輿を台車に乗せる



神事



巡行



神輿出し

神輿を神殿から出すのは宮仕だけが行う。令和四年の「神輿出し神事」は宮仕七名と宮司だけで午前十一時から始まった。まず宮司が低頭した宮仕達をお祓いする。その後宮仕四人が神輿奥に入り神輿を恭しく運び出して拝殿の台上に置く。移動時に神輿頭上の鳳凰が天井部に触れるのを避けるため鳳凰だけをまず運び出し台上に置く。台上に据えた神輿を宮仕達は乾いた布切れで拭き清掃を行う。その後「神輿出し神事」が行われ、御霊遷しを行う。この神事の際は宮司と宮仕以外の人は社殿内に入ることは禁じられており、この神事は特に神聖視されている。神事終了後の西留宮司から宮仕達へ語り話の中で、この弥五郎どん祭りに際しては神職よりも宮仕が上であるというような言葉がはいっていた。

#### (四) 矛や旗

旗持ちは元々宮仕が奉持しており、昭和六十二年までは宮仕が奉持していたが、岩川在住の宮仕家が少なくなってきたので自治会長（氏子総代）が奉持するようになっていく。矛付き旗竿の下部に小さな①〜⑧と番号紙が貼つてあるが、これは平成二十年頃の中央公民館長が順番を間違えないようにと付けたものである。しかし今はご神幸列の順番はあまり気にしていないようで行列順は毎年変っている。旗類には、神社旗一本（氏子総代）。矛付き天狗面（氏子総代二人、猿田彦とも言われる）、矛柱付き日月旗一对（氏子総代二人）、矛付き比礼旗四本（氏子総代四人）などがある。傷んできたら祭祀具販売誌等を見て購入している。

#### (五) 装束

弥五郎どん祭り当日衣装は、弥五郎どん青年部員は茶色法被に白ズボン、白鉢巻き、白足袋を履く。弥五郎どん引きの小学生は白鉢巻き、茶

色法被に運動靴。宮司と神官は白衣に白羽織の狩衣衣装、頭には烏帽子を被る。宮仕は神官用の白衣衣装に家紋入りの黒羽織を着る。宮仕は烏帽子をかぶっていた時もあるが今は被らない。氏子総代は白衣の神官装束。全員が白足袋に白雪駄を履く。

### (六) 巫女

巫女は出発前に神社で行う「本祭」と「御旅所神事」で舞う。弥五郎どん浜下りにも巡行する。巫女舞は中高校生女子生徒が四人から六人が担う。八月ぐらいまでにそれぞれが後任を見つけて引き継いでもらっている。巫女舞の練習は夏休み中から始まる。令和四年の巫女は四人である。巫女舞は平成二十三年（二〇一一）に、四十二代宮司（当時は権禰宜）後藤大志郎氏の提言で結成、氏子総代の吉永一男氏が巫女舞担当となり現在まで続いている。

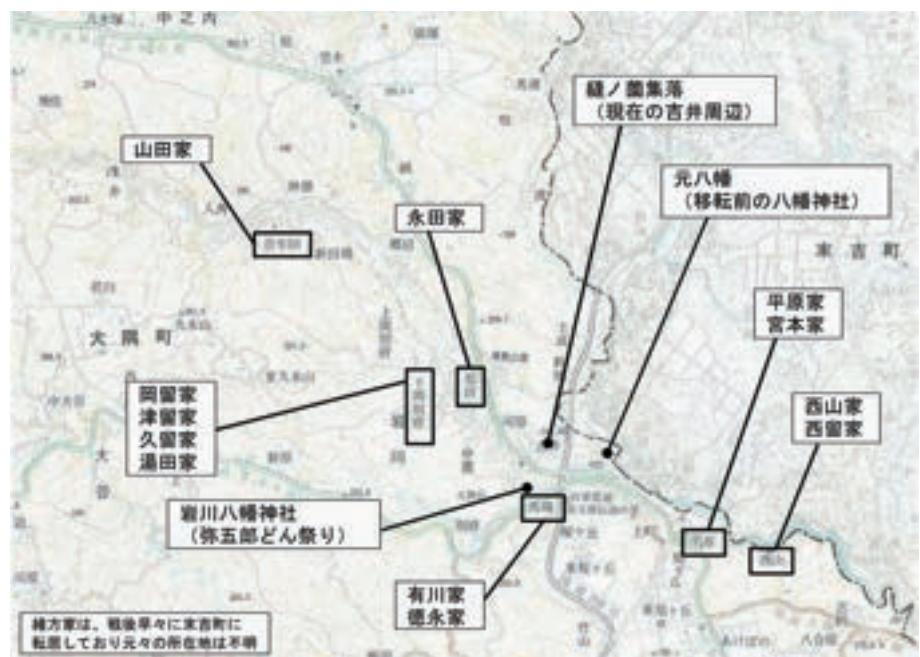


御旅所神事での巫女舞

### 三 宮仕（ミヤダチ）

神社の祭事の中でも「弥五郎どん祭り」に関しては特に宮仕と呼ばれる世襲家がいろいろな役を担っている。宮仕は、岩川八幡神社の祭祀を助ける役であると言われている。宮仕は神社を支える社人と言われる組織である。平成二年（一九九二）作の『岩川八幡神社由緒記』によると、この時の宮仕は、宮本利平・清明、西山静雄、岡留徳馬、湯田時良、津留辰矢、久留治夫、西留正昭、徳永菊雄、緒方篤行・博、永田良一の十家十二人である。山田家は元々宮仕であったが当時しばらく離れていた

ために記載されていないが、現在は宮仕に復帰している。山田家を加えたと宮仕は十一家となる。今でもその末裔が受け継いでいる。本家が断絶したら分家などの縁故筋が引き継ぐことはある（宮本家は、平原家の分家筋にあたり、当時から宮仕を継承したという。また西留家は、親戚関係にある



宮仕の位置図

西山家から継承している。久留家では、当主（治夫）が幼少だったため、親戚関係にあたる湯田家（時良）が一時的に宮仕を務めた）が、全く関係のない家から補充はしない。但し、東馬場の徳永家や有川家は、当人が参列を希望し、宮仕が承認したうえで、一時期ではあるが務めたという例外もある。

現状は、仕事の都合などで岩川から離れて生活する人達が次第に増え、



過疎化もあって次第に岩川八幡神社の祭礼に参加する宮仕が少なくなっている。平成四年弥五郎祭りに参加した宮仕は、岡留健二・弥樹、山田親春・真也、津留安郎・久留守・永田良一の五家七人であった。この他、西留家（西留正昭）が健在だが、宮司のため宮仕としての参加はしていない。

宮仕は岩川八幡神社が石清水八幡から勧請したときに京都から付いてきた人達であるとか、勧請時に岩川から一緒に出掛けた村人達などと言われている。久留守氏（六十五歳）によると、宮仕は岩川から石清水八幡宮へ行き、御神体を持ちかえった人たちで、神輿の位置は、その時の立ち位置ではないかと父から聞いたとのことである。

かつての宮仕は元八幡神社周辺の川沿いに居住している人たちが多く、出自は士族でなく農民のようだ。下岡別府の久留家は、明治二年岩川郷が設立した頃に、谷山等から士族が移住して来たため、中園から下岡別府に移住したという。なお、世襲制の宮仕は、現在の八幡神社が位置する馬場集落内には存在せず、宮仕たちも不思議に感じているという。たまたまなのか何か理由あるのかは不明である。

近くの曾於市投谷八幡宮に「弥五郎どん浜下り」と似た「王子ご神幸祭」がある。この祭りは、鉾先に付けた六体の神王面と鏡・鈴の付いた

宮仕 (五十音順)	家紋	備考
有川家	対い蝶	一代限り
緒方家	丸に三つ柏	
岡留家	丸に蒿	
津留家	丸に鶴の丸	
徳永家	丸に桔梗	一代限り
永田家	丸に五三桐	
西留家	丸に三階松	西山家より継承
西山家	丸に蒿	
久留家	丸に蒿	
宮本家	丸に左三階松	平原家より継承
山田家	丸に桔梗	
湯田家	丸に蒿	一代限り

※現在参加していない宮仕も含まれる

#### 宮仕の家紋

六本の鉾竿を奉持しながら、領域内の御旅所二か所をご神幸する祭礼である。投谷八幡宮にも岩川八幡神社と似たような社人組織がある。その組織表を見ると、薩摩近世農村の門割制度（農村の数軒ずつを単位とした租税貢納体制）を基とした門の名頭家（乙名ともいわれ、班長のような存在）によって組織されたようである。岩川八幡神社の世襲宮仕家については門割制度との関連は今のところ明確ではないが、おそらく岩川八幡神社でも投谷八幡宮と同様に社人組織が作られた可能性がある。

伯父が刀舞を舞った事がある（宮本清明、八十六歳談）、子供の頃に、小学校校庭で刀舞演舞を見た事がある（永田良一、七十四歳談）との証言がある。隣りの大隅町月野の太田神社に神舞面が遺っている。近隣の神社でも神舞が行われていた事は分かっている。岩川八幡神社は神舞が早くに消滅してしまっているが、岩川八幡神社でも神舞があった事は推測できる。岩川八幡神社の宮仕達が神舞に関わっていた可能性もある。

昔の宮仕は、弥五郎どん祭りに関しては大きな権限を持っており、神事では一番前に座し、玉串も最初に奉った。馬場地区青年団が行っていた頃も弥五郎どん組み立て・さらしを巻き・解体・衣装後片付け等の仕



投谷八幡宮王子神幸祭



投谷八幡宮 十体の王子と奉守社人



事は、宮仕の人たちが率先して指図をし作業を進めていた。弥五郎どんの衣服は宮仕以外に触らせなかったともいう。商工会青年部が運営するようになってから宮仕の役割が次第に無くなってきた。今はさらし巻きや着付けも商工会青年部が行い、衣装片付け等は氏子総代達も一緒になつて行っている。

かつて、朝から大雨となった時があり、祭り主催者側（商工会や神社）が宮仕の意見を聞かず浜下りを実行しようとしたところ、宮仕一同は、「相談がなかった。神輿（神様）は、出さない（神輿の金箔が剥げるからという理由もあり）」と大変怒り、弥五郎どんだけが浜下りに出たこともあった。それぐらい当時の宮仕の力は強かった。

現在も「神輿出し・納め神事」は宮仕と宮司だけが神殿に入る。他は一人も神殿に入る事が禁じられている。神殿奥から神輿を出すのは宮仕がやり、宮司は見守るだけである。弥五郎面を神殿から出す事は、今は神職が行っているが、以前は宮仕が行っていたようだ。現在は神社祭礼の正月祭やホゼ祭り等に参加する事が少なくなってきたが、以前は神社例祭には必ず宮仕も参加していたという。

## 第九節 祭りと食事（料理）

### 一 ホゼ祭り

八幡神社の例祭日は、昔はホゼのことを「ジウガツイッカ」と言つて旧暦十月五日と決まっていた。旧暦十月五日をそのまま新暦にもつてくと収穫期より早いので十一月五日にしたのである。名称を「岩川ホゼ」という。

春に豊作祈願を、秋に豊年満作を感謝し願解きをする。祈願が成就したお礼に参り祭祀を行う。ホゼは主に農民が豊穰を祝う。

『神社誌 下巻』に弥五郎どん祭りのときにお供えするものとして「隅州曾於郡五十町村（略）祭祀 二月中卯御供十七膳 神酒一双 押餅 山芋 柿 トコロ 十月四日同五日祭祀御供十七膳 神酒一双 司暖 一祭米六斗 伊勢兵部殿ヨリ毎年出来（以下略）」とある。

これによると、二月中卯の祭祀（豊作祈願）のときには十七膳と神酒一双、押し餅、山芋、柿、トコロを供える。十月四日・五日は収穫を感謝する祭りで、十七膳と神酒一双を供えたことが記してある。また、祭りのときに米六斗を伊勢兵部殿（岩川領主）から出されていたことがわかる。

十七膳とはどのようなものであったかということ『南蛮かんぬし食物誌』に次のように記載されている。

「（略）酒の飲み方だが、当時の饗宴などでは食事の膳が出るたびに酒の盃がすすめられ、これを一献・二献というふうに数えた。今でも料理の献立などというものは此処から出た言葉である。室町期になって、武家などの饗宴としての本膳料理が現れると、この食事と飲酒の關係はいわゆる式三献といういささか儀礼的なものとして残った。つまり、正式

な宴会では、まず式三献の儀があり、それから七五三の膳、そして酒宴ということになる。このような場合の献立は、初献が雑煮、二献が吸い物、三献が同じく吸い物というようにごくあっさりしたものもあるが、初献が五種、二献に三種、三献に三種などということもある。さらにその後七五三膳が出て、それが終わると四献、五献、六献と料理が続き都合十七膳（以下略）」とある。

このことから、式三献で一膳、その後、七五三の膳が出て四献、五献、六献で一膳と見れば合計十七膳となる。これが正式な宴会での食事と飲酒のことで、このような正式な膳（献立）が以前は岩川弥五郎どん祭りでも出されていたことが『神社誌 下巻』からわかるのである。

しかし、いつごろからこのような正式な膳（献立）が省略されるようになったかは不明である。

岩川弥五郎どん祭りの最後の日（五日）はホゼ祭りである。この日はたくさんのごちそうを作る。この日、親戚や知人の家に行き、上がり込んでご馳走になりマンカンメシ（赤飯）・コンニャクの刺身などを竹の皮に包んだものをお土産としてもらって帰るものであった。このような関係を「ホゼい」と言った。以前、岩川では一年を通じて最もご馳走が出るのは弥五郎どん祭りの日（ホゼ）と言われていた。また、この日の料理は翌日が小学校の運動会であったので、ホゼ料理を運動会の弁当として持って行くものであった。

また、明治・大正時代は酒も自分で濁り酒（どぶろく）などを造って客に出したこともあった。

岩川の一般的な家庭のホゼ料理は次のように献立が決まっていた。手作りコンニャクの刺身・甘酒・マンカンメシ（赤飯）・おひら（煮しめに干し魚の焼いたものを入れる）・アオシ柿などであった。ソバは「七十五

日でイミシ（夕飯・夜飯）になる」と言われ、八月二十九日から九月一日頃種をまき、七十五日で収穫する。そのため新しいソバは弥五郎どん祭りには間に合わないから、前年の物を使えばソバを出すことは出来た。ソバはそば粉百パーセントの十割ソバである。

## 二 ホゼ料理

### （一）手作りコンニャク

今回は例年、弥五郎どん祭りの際に、芋コンニャクを作っている新原の園田達男氏宅へ訪問し、妻の幸子氏から聞き取り等の調査を行った。（調査日…令和三年十月二十七～二十九日）

以前は、コンニャク芋を家の茶園に植えており、大きさが約六キログラム（井の大きさ位）になったものを取って芋コンニャクを作った。コンニャク芋は植えてから三～四年位経った物が収穫できる。収穫の目安は茎が腐れ倒れるので、この頃を見極めて掘る。最近では群馬県の農家からコンニャク芋を買っている。

コンニャク作りには灰汁を使うので灰汁の準備が必要である。灰汁はソマガラ（ソバを収穫したときの殻）で取ったものがよい。ソマガラは畑の真ん中で燃やして灰を取る。ソマガラを燃やすと茎の中は空洞であるが、なかなか火は消えないので一晩おかないと再燃することがある。このようにして出来た灰を使って灰汁を取る。

灰汁の取り方は、灰汁取り専用の箱があるので、そこにソマガラを燃やした灰を入れ水をかけて灰汁を取る。



白

芋こんにやくの作り方には二通りのやり方がある。

一つは昔ながらのやり方で、コンニャク芋を洗ってタカオロシという竹製おろし器ですりおろし、白の中に灰汁と一緒にに入れて搗く。灰汁を入れる量は目分量である。釜に水を入れ沸騰したら搗いたコンニャク芋を丸めて入れ、強火で四〇〜五〇分くらい茹でる。茹であがったものは容器に入れた水に取り上げる。

このようにして自家製コンニャク芋を使って、昔ながらの方法で作ると一日で出来上がる。

二つ目の最近の芋コンニャクの作り方は次のように三日間かかる。

### ① 一日目

一回に作る量はムロフタ二箱分で、一箱分にはコンニャク芋一・五キログラムを使う。コンニャク芋一個の大きさは約一・五キログラムである。

コンニャク芋を洗うときはゴム手袋をはめないと手が痒くなる。コンニャク芋に付いている泥や汚れなどを取り除くには金束子（かねたわし）を使う。

洗ったコンニャク芋を約三割の角切りにする。そば殻の灰汁と切ったコンニャク芋をミキサーで攪拌する。灰汁の濃さは舌でなめて確認する。



コンニャク芋



角切りにしたコンニャク芋



ミキサーで攪拌

ムロフタ一個分はコンニャク芋一・五キログラムであるから、ミキサーで約五〇〇グラムずつを三回に分けて灰汁と攪拌する。

ミキサー一回分のコンニャク芋と灰汁を入れ、約四〇秒攪拌したらムロフタ

に移し入れ、メシゲ（木製オモドシ）かヘラでかき混ぜる。この作業を三回やって最後は面をきれいに整える。この作業は手早く行わないとコンニャクが灰汁ですぐ固まってしまうので時間とのたかいかいである。一度に作る量はムロフタ二箱分であるから、この作業を終えたら一晩寝かせる。この時、ムロフタを隙間なく重ねるのではなく、二つ並べたままにするか、隙間を作って重ねる。

### ② 二日目

ムロフタに入れてあるコンニャクが固まっているので、金棒で上から押しつけて切る。さらに、金棒を取り外し包丁できれいに切り離す。

釜（鍋）に水を入れ沸騰させ、コンニャクを入れ茹でる。薪は孟宗竹を燃やす。ムロフタ二箱分を一緒に入れ茹でる。釜に入れたらすぐかき混



攪拌したコンニャク芋を平らにする



金棒

ぜなければコンニャクがくつついてしまうので時々かき混ぜる。コンニャクは沸騰しているお湯の中で最初から浮いている。茹で時間は約四〇分。あまり茹ですぎるとパサパサになる。

容器（桶など）に水を入れ、茹で上がったコンニャクをこの中に入れて灰汁抜きをする。コンニャクを容器に入れたら浮いてくるのでビニールで覆いをする。容器の上には蓋はせず一晩かけて灰汁抜きをする。

### ③三日目

一晩水につけて灰汁抜きしたコンニャクを金網ですくいあげ

る。  
灰汁とコンニャク芋の量は、  
コンニャク芋五〇〇グラムに灰汁〇・  
八〜一匙（コンニャク芋の量の



金網

増減による）であるが、コンニャク芋一・  
五キログラムを三回に分け、一回分ずつ目分量  
で入れるため、それに応じた灰汁を入れ  
る。コンニャクの出来上がり寸法は八センチ  
×五センチ、厚さ四センチ。

芋コンニャクを食べるときのタレは酢  
醤油とショウガの千切り、酢味噌など好  
みで食べる。

コンニャク芋が少ないときはカライモ  
を足して作る。また、灰汁が良くないとコンニャクが固まらない。



出来上がった芋コンニャク

## (二) 甘酒

日本の甘酒の初見は『日本書紀』応神天皇一九年の冬一〇月にある「醴酒」とされる。醴は甘酒を意味する。

甘酒について『和漢三才図会』に次のようにある。「醴〔音は李〕はん〔音は敗〕酤〔音は沽〕和妙は古佐介。俗に甘酒という。」

△思うに、醴は酒に造って一夜で熟したものである。味は大変甘い。大抵、米一斗を飯に蒸し「充分に冷やして用いる。急いでいる場合は少し温いものを用いる。一、麴一斗、水一斗二升を和勻せるとでき上がる。絞らずに飲む。あるいは麴を洗って飯粒を取り去り、用いた麴衣を取り去ると啜つても歯にさわらず良い。祭酒に多く醴を用いる。毎年六月一日には天子に醴酒を献上する。」とある。

このことから、甘酒は祭りの時の酒として使い、また、毎年六月一日に献上することから、献上に値する大切なものであり飲むと口当たりの良いことがわかる。

甘酒作りに大切な麴は、以前は、麴屋に米を持っていき、麴と交換してもらっていた。粳米二升に麴一キログラムを入れて作る。甘酒作りは各家庭の秘伝のようなものがあって、それぞれの家庭で味が違う。他の家庭とのやりとりで味が工夫がなされ、また、新しい味ができる。

作り方は、粳米二升を前日に洗って浸しておき、翌日蒸して餅に搗き、麴一キログラムを入れて攪拌する。攪拌するときくつきそうになったら焼酎一合位を入れる。ドロドロになったらよいので容器（カメツボなど）に入れ、一晩蓋をしないでザルなどをかぶせて置く。完全に冷めたら冷蔵庫庫に入れる。冷蔵庫でも発酵する。甘みがでたら甘酒として食べられる。ほぼ三日位で食べられるようになる。味が薄いときはモロミを加える。

甘酒は弥五郎どん祭りの一週間位前に作った。弥五郎どん祭りを見に



来た客にホゼ料理と一緒に出した。

### (三) マンカンメシ(赤飯)

赤飯のことを大隅半島の一部で「マンカンメシ」と言っている。この「マンカンメシ」については後でふれる。

『和漢三才図会』に次のようにある。「饊こわめし」「音は強」強食「和妙は古ハ伊比」赤飯「世木波牟」

△思うに饊とは硬い飯である。今も古も嘉祝の日にはこれを造って饗の代わりにする。ちょうど醴を造って酒の代わりにするようなものである。簡易に急用に備えることができる。大体、粳米一斗に赤小豆三升を混ぜて蒸すと、色は紫を帯びる。俗にこれを赤飯とい、炒塩・黒胡麻を少しまぶして食べる。(略)

また、この赤小豆の効用について

も同書に次のようにある。「元旦・人日(正月七日)および立秋の日に「七個あるいは十四個」呑むと瘟疫(熱性伝染病)を避け禳うことができる。元旦、正月十五日(赤小豆十四個、麻子七個を井戸に投入すると、瘟疫を避けられる。大変効果がある)」

赤飯のことを大隅半島の一部で「マンカンメシ」と言っていることについて聞いてみたが、言っている本人たちも「昔から言っているから」「親や周りの人たちが言っているの」と言うだけで、特に意味などを気



甘酒



ホゼ料理の一例

にすることなく自然と使っているのであって、改めて聞かれてもわからないという。

『鹿児島方言辞典 下』にはマンカンメシ 赤飯。御強。マツカノメシ(真赤・飯)の転訛。隅會(隅一岩川・段坂元。有一伊崎田・山重・野神。末一岩崎・二之方・南之郷。松一尾野見)。マンカンメシ 小豆飯。隅肝。曾。始。諸。小。西。北。このようにマンカンメシという言葉は、真赤飯の意味として大隅地方や諸県地方などで使われていることがわかる。

また、『鹿児島方言辞典』にはマンカンメシ(隅)アズキメシ 小豆飯―赤飯とは異なり、煮小豆を粳米飯の中に入れる祝飯とす、とあり、大隅地方では、アズキメシのことをマンカンメシといい、赤飯とは違うことが記されている。

『都城さつま方言辞典』にはマンカンメシ(饅羹飯)の意とある。別の見方をすると、マンガン(満願・万願)と言っていた言葉が転訛してマンカン、これは願いが叶うように、また、願いが叶った、というときに赤飯を供えていたことから、マンガンの飯がマンカンの飯となり、マンカンメシと言われるようになったとみることもできる。

### マンカンメシの作り方

小豆は自分の家で作った小豆・ササゲを使う。もち米を洗って一晩水につけ、翌日からあげる。小豆を煮る。煮汁は捨てないでそのまま煮る。沸騰して一〇〜十五分くらいで火を止める。米だけを



マンカンメシをセイロで蒸している



セイロで一度三〇〜四〇分蒸す。この蒸しあがった米をムロフタに移し、煮た小豆と煮汁・塩を混ぜ合わせる。これを、もう一度セイロで三〇〜四〇分蒸す。二度目が蒸しあがったらムロフタに移し出来上がりとなる。



マンカンメシ (赤飯)

#### 宮崎県日南市飫肥弥五郎さま祭りとお赤飯

日南市飫肥弥五郎さま祭りの日に地域の人々は弥五郎さま祭りが行われる田ノ上八幡神社にお守り(御幣・札)を買いに来る。この時、風呂敷包みを提げて来る人々がいる。この人々は受領所(札受取所)に風呂敷包みを持って行き、そこにいる係の女性に風呂敷包みを渡す。受け取った係の人は、持って来た人に「いくつですか」と尋ねる。重箱を持って来た人は必要な御幣と札の数を伝えると、重箱の中の赤飯を白い紙に少し取り分け三角に紙を折り、重箱の中へいわれた数入れる。これを宮司がお祓いし持って来た人に渡す。赤飯を持って来た人はそれを受け取り、



重箱からお祓いする赤飯をとり分けている



お祓いを受けた赤飯

伝えた御幣と札を受け取りお金を払って帰る。残った赤飯は神社への奉納となる。

また、前田博仁調査委員によると、以前は残った赤飯は祭り関係者が弁当として食べていたという。しかし最近では、弁当をとるようになった。

最近では米農家も減り、また小豆を作っている家も少なくなったので赤飯を神社へ奉納する家も少なくなってきたという。また、赤飯を持ってきた農家の方は神社へ「モチワラ」で作ったしめ縄を奉納しているという。しめ縄はモチワラで作るのが良いという。

ちなみに御幣は①火の神(赤い御幣) 床の間の注連縄・神棚に祀る。②水の神(白い御幣) は水の神様・水戸・井戸に祀る。③荒神幣(白い御幣) は火の神様・火所・竈に祀る。④高幣は神棚または床の間に祀る。その他に伊勢神宮のお札と田之上八幡神社のお札がある。

御幣やお札をこの日に買う人がひっきりなしに来られた。年末年始ではなくこの日に買うのがこの地方では一般的なのだろうか。

しめ縄を張った御幣・札納めの場所も設けてあり、持って来た御幣や札を納める人々もおられた。

#### (四) ヒラまたはオヒラ(煮しめ)

ヒラとは平皿や平碗のことで、これに煮物(煮しめ)などを盛る料理をいう。

鹿児島県内では煮しめ料理のことを「シメモン」という。

材料は大根・里芋・筍・人参・シイタケ・ゴボウ・コンニャク・揚げ豆腐などで、醤油・みりん・砂糖・塩などで味付けする。以前、岩川のホゼ料理のヒラには干し魚の焼いたものを入れていた。この干し魚はサバをぶつ切りにし、串に刺してイロリで炙ったものを使った。現在はイ

ロリも無くなりサバを乾燥させることができなくなり、サバを入れなくなつたという。

この頃から、鶏の刺身や鶏の煮込み料理を作る人たちが出てきたが、やはり、弥五郎どん祭りの料理は昔ながらのヒラや手作りコンニャクが良いということで、鶏の刺身や煮込み料理をする人はほとんどいなくなつたという。

ヒラ(煮しめ)に入れるサバについては『たべもの語源辞典』によると、「(略)サバは江戸時代に七夕祭りの宵、すなわち七月六日には御三家をはじめ諸大名から七月七日の祝いとして將軍家にサバ(刺鯖)を献上したものである」とある。このようなことから、江戸時代サバは献上に値する大切な魚であつたことがわかる。このようなサバを岩川弥五郎どん祭りではお祝いの料理の材料として使つていた。

#### (五) アオシ柿

岩川弥五郎どん祭りのホゼの頃になると柿が色づいてくる。以前は、今のような甘柿は少なく渋柿が多かつたので、渋抜きしないと食べられなかつた。その渋抜き方法の一つに「あわす(酛す・さわす)」という方法があつた。

釜の中に水・カラタケの葉・タデ・カライモンツラ(唐芋のツル)などを短く切り、柿と一緒に入れ、さらに木灰と塩を入れて弱火でポツポツ炊く。この時よく混ぜる。手を浸けられる熱さになったら、釜の中の柿など全て樽に移し入れ一番上に藁を載せる。温度が下がらないように、更にこの上に筵を被せ、樽の周りも筵で包み、縄で熱が外に逃げないようにしっかりと締める。一晩置いたら食べられる。

#### (六) カライモアメ

カライモの収穫時期に出たクズイモや小さい芋の皮をむき、一時間位煮て、ひと肌冷まし麦芽を入れサラシで絞つて煮詰める。一輪車一杯くらいの芋で二升位のカライモアメができる。

この作業は時間がかかるので、朝、四時ごろ火をつけて、このような作業をして夕方六時ごろ仕上がつた。芋の絞りカスは牛の餌になる。

このような岩川弥五郎どん祭りに古くから作られてきたホゼ料理は現在も手間ひまかけて作る方々がおられ、伝統食文化が受け継がれている。

#### 引用文献

- ・鹿兒島縣神職會編『神社誌 下巻』一九三五年
- ・伊東昌輝『南蛮かんぬし食物誌』一九八三年 鎌倉書房
- ・島田勇雄校注『和漢三才図会17 東洋文庫527』一九九一年 平凡社
- ・島田勇雄校注『和漢三才図会18 東洋文庫532』一九九一年 平凡社
- ・橋口満『鹿兒島方言大辞典 下』二〇〇四年 高城書房
- ・島戸貞義『鹿兒島方言辞典』一九七四年 図書刊行会
- ・瀬戸山計佐儀『都城さつま方言辞典』一九九二年 三州文化社
- ・清水桂一編集『たべもの語源辞典』一九八四年 東京堂出版

## 第十節 奉納芸能・奉納武道・屋台等

十一月三日は、旧岩川小学校校庭や運動公園・大隅中体育館・大隅文化会館などで剣道・柔道・弓道・空手・バレーボール等が行われる。また、太鼓踊り・棒踊りなども奉納される。

当日は、馬場通りにバラやシヨケなどの竹細工製品や鍬・鎌・鉋などの農具や出店が軒を連ねる。出店の場所割りは明治の頃もあつたようである。明治四十二年作成の岩川市場規約（坂口良一文書）は都城と志布志小間物商同業組合で作成されているが、これによると都城と志布志から一名ずつ責任者を出し、準備の上一番クジ・二番クジとクジで決めるようにしてある。

露店農具市は祭りにつきもので、神社前から県道沿い線両側に所狭しと並び、特に竹細工（加世田から）・金物市（加世田から）・植木市（鹿児島市から）などは遠方から出張販売が行われ盛況であつた。

弥五郎太鼓については、弥五郎どんが浜下りする時、音が欲しいという声が商工会青年部から起こり、これがきっかけで昭和五十七年弥五郎太鼓が創設された。その時、吹奏楽に造詣の深い伊藤清広氏に作曲と指導を依頼した。メンバーは当初、商工会青年部であつたが次第に広がりを見せ、各職場の同好会の人々も活動している。

弥五郎音頭は町制四〇周年を記念して「弥五郎どん」の歌として創られた。

### 一 奉納芸能について

#### (一) 弥五郎太鼓

昭和五十七年に創設された和太鼓団体。弥五郎どん祭りでの奉納太鼓

を主に、様々な祭りや各種イベント等で活動している。弥五郎どんを表現した「巨人おおひと」をはじめ、各種パレードで歩きながらたたく「うかれ」「よせ」「浜下り」等の抱え太鼓による曲など、様々な楽曲を持つ。現在、大人二十名は十八歳以上で、男性十五名・女性五名・子どもは二十二名で、小学生～高校生までで男性五名・女性十七名である。

練習時間は毎週火曜・水曜・木曜の二〇時～二二時。参加条件は特にはない。弥五郎太鼓奉納は午前中二回の演奏があり、弥五郎どんの浜下りにもついて行き、神社まで登ってこられない年配者が沿道で観覧している姿を見ると、そばまで行って元気づけの演奏を繰り返す年配者を楽しませている。

#### (二) 神牟礼太鼓踊り

曾於市の無形民俗文化財に指定されている。神牟礼集落の伝統行事で参加者は神牟礼集落の住民である。

神牟礼太鼓踊りは島津義弘朝鮮出兵後の戦勝祝いとして始められたという。

昭和九年の干ばつの時、雨乞いのために復活した。

鉦四（一人は親鉦）・太鼓十二（一人は親太鼓）、世話人などいずれも男性であ



神牟礼太鼓踊り（市中パレード時）



弥五郎太鼓（浜下り巡行時）



る。鉦四のうちの親鉦は昔からの物である。

鉦の服装は浴衣に袴（正式には紋付袴）、黒足袋・草履・花笠を被っている。太鼓の服装は長袖シャツ（ジバン）・水色股引・草履・背に矢旗。太鼓は矢旗を背負い、太鼓を前に抱いている。

芸態は先頭に鉦四人、後ろに太鼓が続き二列で行く（道鉦）。庭入りで縦二列になり、鉦叩きが中入りに太鼓打ちは外側に位置する。列から陣を組む踊りを三回ほど繰り返す。

令和四年は十名、午前中に行われる市中パレードに参加している。通常の参加人数は二十名程度で、四十歳前後の人が参加している。現在は六〇代〜七〇代の男性も参加している。練習は弥五郎どん祭りの一〜二ヵ月前から行う。男性のみで構成されている。

神牟礼太鼓踊りは、残念ながら高齢化が進み後継者不足のために、本年度を持って活動停止となる。

高齢化と人数不足により市の伝統文化財が一つ姿を消すことになる。

なお、市中パレードには、月野広津田の棒踊り・荒谷棒踊り・梶ヶ野ベブ踊り等の郷土芸能団体が参加した時もあった。



神牟礼公民館にて最後の奉納(令和4年11月3日)

## 二 奉納武道大会等

各部から応募や案内状発送などが行われる。この大会では賞状がある。また、南日本新聞社から各部にメダルが渡される。

令和四年の競技種目や参加者数等は次の通り。

・剣道は旧岩川小学校校庭で行われた。出場団体は百三十六団体  
四百三十名、小学生一般まで各団体・部活動所属で団体戦。

・空手道は岩川弥五郎が武の神様であることに由来している。旧岩川小学校校庭で行っている。空手には全日本空手道連盟（二十団体・二百五十二名）と少林寺流空手道練心館（十四団体・百六十二名）が参加している。

・弓道は三十九団体・百七名が参加している。中学生から一般まで、各団体・部活動所属で個人戦・団体戦がある。

・示現流は十代〜五十代の十名前後の参加者で、祭りの日だけ外部（薬丸示現流顕彰会・鹿児島本部・東京道場）からの参加である。ほぼ男性。  
・バレーボールは九団体・九十四名で小学生・中学生の部活動に参加していることが条件。運動公園体育館で行う。

・ゲートボールは三団体・十五名で一般。  
チーム所属。末吉総合体育館隣りのふれあい広場で行われる。

・柔道は今回はコロナ禍で中止となった。  
参考までに令和元年は、十七団体・九十名であった。小学生・中学生の部活動・スポーツ少年団に所属。県外からも参加。

小学生・中学生が福岡県からも参加している。個人戦・団体戦。

・相撲大会は八団体・三十名。赤ちゃん



相撲大会

土俵入り、小学生・高校生一般で部活動・各団体に所属する。個人戦・団体戦。県内の高校生（鹿児島商業・樟南・鹿屋）と宮崎県（鵬翔高校）

などから参加。相撲大会にはJAから米と野菜が商品として渡される。  
なお、現存する記録によると、昭和二十九年には、柔道・剣道・弓道・相撲が祭り翌日の六日に実施されていたことが確認出来る。

### 三 屋台・出店

屋台・出店などは都城にある露店商組合に任せてある。商工会事務所が連絡にあたる。

令和四年は、イカ焼き・焼き鳥・唐揚げ・フライドポテト・弁当・ジュース等の飲食店が八十六店舗、竹細工製品・植木屋・おもちゃ屋・福袋くじ等の飲食以外が十四店舗の合計百店舗が出店した。

加世田鎌を加世田から持ってきていた。鎌の他に包丁・ハサミなども売られていた。

竹製品も加世田からの出店でバラ・ザル・シヨケ・模型の唐箕など多数あった。

その他、植木・苗ものが出ていたが鹿児島市から持って来たとのことであった。



露天商



加世田鎌



植木・苗もの

### 四 来客などへの振る舞い

振る舞いは甘酒・豚汁などである。甘酒は地元の業者が作って持ってくる。それを、弥五郎どん祭りを見に来た人々に振舞っている。

豚汁は青年部の料理屋をしている人と青年部の人を手伝い、ヤゴロウ（八五〇）の語呂合わせで八五六食作って振舞っている。弥五郎どん祭り実行委員会から青年部に助成している中から出す。

### 五 市中パレード

記録によると、昭和四十年に、岩川中学校と県警察音楽隊によるパレードが実施されたのを機に、同四十五年には、神牟礼太鼓踊りや月野棒踊り等の郷土芸能も参加する等、次第に規模が大きくなっていった。岩川市街地から旧岩川小学校までの約二キロメートルをパレードしていた。同五十七年には、町婦人の踊り連・町消防団・岩川小鼓笛隊・子弥五郎（初）・弥五郎太鼓（初）が参列、今の市中パレードの原型が出来上がった。

令和四年は、パレードの部に十六団体・二百九十四名・踊り連の部に十団体・百七十二名の計二十六団体・四百六十六名が参加、三日の十一時十五分に鹿児島交通の駐車場を出発、旧岩川小学校校庭までパレードを実施した。行進順番は左のとおり。

#### 【パレードの部】

- ① 岩川小学校吹奏楽部
- ② 大隅中学校吹奏楽部
- ③ 曾於市高等学校吹奏楽部
- ④ ミスター弥五郎・そお観光大使
- ⑤ 名誉会長・保存会長・市長



振る舞い（神社境内）



議等 ⑥曾於市商工会 ⑦曾於市森林組合 ⑧関西弥五郎会 ⑨神牟礼太鼓踊り保存会 ⑩子弥五郎 (JAそお鹿兒島大隅支店) ⑪子弥五郎 (岩川小学校四年生) ⑫子弥五郎 (恒吉小緑の少年団) ⑬子弥五郎 (鹿兒島銀行) ⑭鹿兒島興業信用組合岩川支店 ⑮子弥五郎 (岩川保育園) ⑯子弥五郎 (太陽の子幼稚園)

【踊り連の部】

⑰JAそお鹿兒島女性部大隅支部 ⑱曾於市商工会女性部大隅支部 ⑲大隅地区民生委員児童委員協議会 ⑳岩川校区公民館女性部 ㉑曾於市地域女性団体連絡協議会 ㉒鹿兒島相互信用金庫岩川支店 ㉓鹿兒島銀行岩川支店 ㉔鹿兒島興業信用組合岩川支店 ㉕末吉ひよつとこ踊り同好会 ㉖曾於市安全安心協会

六 のど自慢・歌謡ショー等の演芸大会

かつては、岩川小学校校体育館や神社境内、やごろう苑敷地内で実施されていたが、現在は大隅文化会館にて行われている。

令和四年は、のど自慢大会・プロ演芸ショー (森山愛子) が開催された。



市中パレード

七 文化祭

大隅文化協会主催による作品展示が、大隅中央公民館にて行われている。書道・短歌・陶芸・パッチワーク・大隅町内の小中学校・子ども園等の作品が展示された。

また昔は、オモト・菊・盆栽・刀剣・ツボ・写真等の展示も行っていた。

八 前夜祭 (どんどん祭り)

平成三年、大隅町文化会館 (現大隅文化会館) が開設されたのを機に、弥五郎どん祭りを更に盛り上げようと澤俊文氏を中心に企画され、前夜祭「どんどん祭り」が開催された。

初回は文化会館の外で開催されたが、二回目からは施設内で行われ現在に至っている。本祭と同様、コロナ禍で二年連続中止であったが、令和四年は通常通り開催された。

今回のプログラムは、曾於高校・大隅中・岩川小吹奏楽、市長あいさつ、ミスター弥五郎・そお市観光大使紹介、弥五郎どん祭り実行委員長あいさつ、巨神伝説太鼓衆大隅弥五郎太鼓ジュニア、東川隆太郎氏による講演「弥五郎どんを深ぼりしよう」、弥五郎どんファンタジア「子供と大きな子供のための音楽劇」等が行われた。



前夜祭 (11月2日)



文化祭

## 九 その他

祭り当日のその他の催し物として、令和四年は、薬丸自顕流演武・弥五郎どんの昔の写真展示・弥五郎ポロシャツ等の販売・岩川小六年生によるやご弁（駅弁）販売・JA青年部の野菜等販売・建設機械の無料試乗会が行われた。

それ以前では、岩川小六年生による古代米の販売・バナナのたたき売り・陸上自衛隊車両展示・古い発動機の展示・ヘリコプター遊覧飛行（弥五郎伝説の里・フリーマーケット（弥五郎伝説の里）・地元特産品販売コーナー等があった。

また昭和期は、焼酎の銘柄当て、タバコの早吸い・吸い分け競技、ナシ大会・素人写真コンクール・弥五郎面や弥五郎どん模様入りハンカチの販売・弥五郎とつくり販売等のユニークな催し物もあった。



昭和62年の市中パレード風景  
月野広津田棒踊り（上）・踊り連（下）

## 第十一節 弥五郎どんの文化的広がり

### 一 弥五郎どんと言えは岩川

「弥五郎どんと言えは岩川、岩川と言えは弥五郎どん」と県下では大勢の人が答える。山口・飢肥の弥五郎どんは、県外なので、知るわけない。これほどに弥五郎どんに染め上げたのはいつ頃からだろうか。

岩川の人々が一致団結して、なぜ「弥五郎どん」に打ち込んだのだろうか。そのわけは？

① 団結心が強い。特別のきっかけは、戊辰の役での目覚ましい働きをした。そこで、末吉郷から分かれて岩川郷になった。心を一つにできる。

② 弥五郎どんは巨大で、白い面に茶色の衣に二本差し、面もかつこよい。

③ 弥五郎祭りとホゼとがうまい具合に混じり合って、一つの祭りになった。収穫後なので、お祭りの時期にぴったりであった。

④ 朝、暗い時間からの「弥五郎起こし」は神秘的である。

⑤ 弥五郎の本を作って、子供たちに弥五郎の行動や親切心などを広めた。

⑥ 強くてやさしい、人々を思いやる弥五郎像ができた。

⑦ 子供たち（五年生）を弥五郎どんの引き手にした。その好印象が大人になっても続く。

⑧ いろいろなグッズを作った。面・お守り・菓子・シャツなど。

⑨ 町の中に弥五郎関係のもの、交通信号の上の面、橋の欄干に絵や写真など。

⑩ 弥五郎どん行列だけでなく、体育系の試合や芸能大会という一大イベントになってきた。

⑪ 鹿児島市や東京・大阪・万博・バルセロナなどに行き、自信が付いてきた。

⑫ 弥五郎どんの里に弥五郎どんの銅像・弥五郎まつり館。公民館に弥五郎どんの展示場を作った。

⑬ 二層高さの人形を作って数か所へ配り、子弥五郎・孫弥五郎まで作ってあちこちに展示した。遠くは熊本大学へ縁があつて飾られている。また、佐賀県東松浦郡玄海町の玄界エネルギーパーク九州ふるさと館にも大きな弥五郎どんを飾ってある。これは平成十二年(二〇〇〇)に館を作るとき、九州内でインパクトのあるものなど、代表的なものを展示するために製作会社に頼んで、実地調査をして製作したものである。九州ふるさと館のブログを開けると、岩川弥五郎どんの写真が出ています。

などなど。弥五郎どんに対する思い入れや行動が数えきれないほどある。

## 二 祭りが盛んになる

- ① 明治二年(一八六九)、岩川郷ができた。
- ② 明治二十二年(一八八九)、岩川村となった。
- ③ 明治二十七年(一八九四)、日清戦争勝利。
- ④ 明治三十七年(一九〇四)、日露戦争勝利。
- ⑤ 大正三年(一九一四)、神社移転。
- ⑥ 大正十三年(一九二四)、岩川町となる。
- ⑦ 昭和三十年(一九五五)、曾於郡大隅町となる。
- ⑧ 昭和四十五年(一九七〇)、万博へ出場。
- ⑨ 昭和五十年(一九七五)、創建九百五十年の祝。
- ⑩ 昭和六十一年(一九八六)、大阪御堂筋パレード一回目。
- ⑪ 昭和六十三年(一九八八)、県指定無形文化財になる。
- ⑫ 平成二年(一九九〇)、日南飴肥城下祭りに、山之口・岩川の弥五郎

が出演。

- ⑬ 平成四年(一九九二)、スペイン、バルセロナの巨人博覧会に参加。
- ⑭ 平成五年(一九九三)、北九州市の「わっしょい百万石初祭り」「都城盆地祭り」「御堂筋パレード二回目」「小林秋祭り」に参加。
- ⑮ 平成七年(一九九五)、弥五郎伝説の里とし、弥五郎まつり館・やごろう農土家市を建設。「大阪御堂筋パレード」へ三回目参加。教材『創作やごろう物語』大隅町で出版。
- ⑯ 平成八年(一九九六)、弥五郎銅像が完成。世界帆船祭りに弥五郎どん参加。
- ⑰ 平成十年(一九九八)、「大阪御堂筋パレード」四回目参加。
- ⑱ 平成十二年(二〇〇〇)、第八回地域伝統芸能全国フェスティバル大会(旭川)に参加。
- ⑲ 平成十三年(二〇〇一)、弥五郎伝説の里五周年フェスティバルに3兄弟初めて集まった。
- ⑳ 平成十六年(二〇〇四)、九州新幹線開業イベントに鹿児島市へ。「大阪御堂筋パレード」五回目参加。
- ㉑ 平成十七年(二〇〇五)、曾於市となる。
- ㉒ 平成二十年(二〇〇八)、東京おはら祭り、明治神宮参道・翌日渋谷道玄坂でのおはら祭りにパレード。ねんりんピック鹿児島二〇〇八に参加。子弥五郎5体完成。各所に展示。その後、孫弥五郎・曾孫弥五郎を作成。

大正三年以前の旧八幡神社の場合、百歳ちよつとの弥五郎どんのお出ましで、もの足りない浜下りであつたらう。八幡神社を現在地へ移転し、地元の、いわゆる麓の青年が中心となり、弥五郎どん引きを始めた。最

初は短い距離であったが、あちこちからここまで来てくれという要請があり、次第に距離が延びていった。大正になり電燈がつき、電線が張られると、電気会社が電線を切つてから引くなど変遷があるが、第二次世界大戦が終わつて、青年だけでは手不足となり、壮年を含めた馬場同志会が昭和三十二年まで弥五郎どん祭りを取り仕切つた。翌三十三年から、馬場と森園合同の麓青壮年会が母体となった。同四十一年から大隅町商工会青年部に引き継がれた。

次第に豊かになり、心に余裕が出てきた昭和四十五年、万国博覧会が大阪であり、世界の人々の反応を肌で感じ、手応えがあつた。この年、弥五郎どん台車を自動車に変え、弥五郎どんを鉄骨で支えることとした。

昭和五十年、創建九百五十年を迎えるに当たつて、神社の奉賛会では神社の整備を計画した。神社参道のコンクリート化・社殿や付属の建物・祭具格納庫などの改造。

弥五郎どん祭りの組織と神社などの整備が済み、ますます祭りが盛んになってくる。

昭和六十一年頃から、急激にあちこちから弥五郎どんの出番が多くなつてくる。昭和四十五年の万国博から、二度あつたオイルショックから立ち直つた頃、万国博から十六年経っているが、この頃から弥五郎どんは引つ張りだことなる。

次は、平成七年、弥五郎伝説の里という、弥五郎どんを広める施設を作つた。これにより、弥五郎どんを市民やそれ以外の、大勢の人々へ広めることになる。同時に、小中学の児童・生徒に向けての教材、『創作やごろう物語』を出版した。これにより、弥五郎どんのやさしさや思慮深く賢い、たくましい、隼人の大将であることを印象付けていった。

五年生の男の子が弥五郎どんを引つ張るようになるのは、この頃から

であろうか。弥五郎どんを引つ張るのが特権のようになり、今では引かなければならないようになった。令和元年、コロナで祭りは中止となつたが、四年に一度の弥五郎どん作り変えもあり、五年生の思い出のためにも、神社から坂を下り、校庭まで往復する。なくてはならない祭りになっている。





写真7 弥五郎どん入りのTシャツ

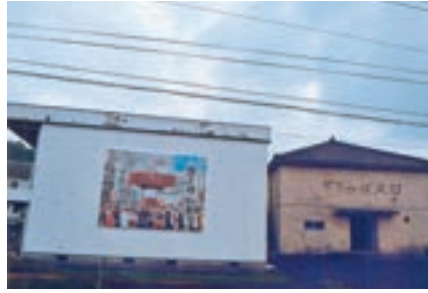


写真4 曾於市商工会大隅支所  
近くの弥五郎どんの壁紙



写真1 農土家市の子弥五郎



写真8 交差点の弥五郎どん



写真5 上野菓子舗の看板

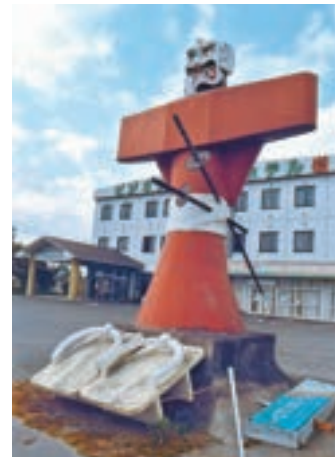


写真2 ビジネスホテル岩川前  
の弥五郎どん



写真9 高田橋の弥五郎どん



写真6 上野菓子舗のお菓子



写真3 曾於市商工会大隅支所の  
弥五郎どん張り紙



写真10 高田橋の欄干の弥五郎どん



## 第十二節 コロナ禍での祭りの様子

### 一 新型コロナウイルスによる祭りの中止

令和元年（二〇一九）に発生した新型コロナウイルス（COVID-19）は、翌二年になって世界中で感染が拡大し、国内では一月十五日に感染が初確認された。

鹿児島県内では、同年三月二十六日に初めて感染が確認（曾於市では、同年十一月五日に初確認。県内五〇五例目）されて以降、徐々に感染が拡大傾向にあったため、弥五郎どん祭り実行委員会は、八月十七日の実行委員会において、新型コロナウイルス感染防止の観点から祭りの中止を決定（武道大会や演芸大会、前夜祭等も含む）した。

但し、当年は四年に一度の衣替えの年に該当しており、本体・衣の新調及び、十一月三日当日の組み立ては実施することにした。これは昭和六十三年、昭和天皇の病状悪化により祭りを中止しているが、この時も弥五郎どんの組み立てだけは実施しており、今回もそれに倣う形となった。

また、令和三年になっても感染拡大は収まる気配は無く、二年連続で祭りは中止となったが、弥五郎どん本体の組み立ては実施している。

なお、二年ともホゼ祭り（例大祭）は五日の午前十時から執り行っている。

### 二 思い出作りのための弥五郎どん浜下り

現在、弥五郎どん祭りでのメインとなる浜下り神事では、大隅町内の小学五年生男子が引き手を担っている。これは、地元の小五生男児にとつては一生に一度の記念すべき行事でもある。

祭り自体は中止となり、令和二年に該当する男児は弥五郎どんを引く

ことが出来ないのは可哀想であり、そのためにも浜下りをやるべきだとの声が上がリ、思い出作りの記念イベントとしての弥五郎どん浜下りが実施された。三日当日は、朝八時に神社境内を出発、鳥居前で一旦停止し、記念撮影を行った。通常開催の場合、鳥居前で弥五郎どんと一緒に集合写真を撮影することは出来ないため、当事者にとつては特別な時間になったといえる。その後、岩川小学校のグラウンドへ入り、各学校毎で、保護者も含めて思い思いの記念撮影を行った。しばらくしてから、神社の坂を駆け上がり、記念イベントは終了となった。

短い時間ではあったものの、児童やその保護者にとっては、まさに一生ものの記念になったと思われる。



令和2年鳥居の前にて



令和3年鳥居の前にて

令和三年も同じく祭りが中止となったため、同様の措置が取られた。なおこの時は、グラウンド敷地内において、コロナ収束祈願の神事が執り行われている。

なお令和三年は、十二時から「御神輿出し神事」をして十四時から「新型コロナウイルス終息祈願祭」も行なった。十六時から「御神輿納め神事」を行い「巫

女舞」も奉納もされた。十一月五日まで神社境内に立っていた弥五郎どんは「秋季例大祭（ホゼ祭）」後に解体された。



令和2年岩川小学校校庭にて



令和3年コロナ終息祈願祭

### 三 保存会によるその他の取り組み

弥五郎どん保存会及び祭り実行委員会では、コロナ禍での祭りに関する取り組みとして次の取り組みがあげられる。

一つ目に、祭り中止を知らせるためのポスター及び看板の設置である。ただ令和二年は、弥五郎どん本体は神社に鎮座し、神事は実施されるということの周知が行き届いていなかったとの反省点もあり、翌三年の看板には、弥五郎どん組み立てと神事は実施されるということを強調した表現に改められた。

二つ目に、マスクの配布である。祭り実行委員会は、子ども達が弥五郎どんをもっと身近に感じて欲しいと、弥五郎どんをモチーフにしたキャラクター「やご助」を、弥五郎どん保存会の太澤津幸子氏が考案、同保存会の福田順一氏が企画し、オリジナルマスク・アクリルキーホルダー・

コロナ感染対策を呼びかけるチラシを作成し、令和二年十月下旬に曾於市大隅町内の小中学生に贈った。



令和3年看板（ローソン大隅岩川店前）



令和3年看板（八合原交差点）



やご助マスク



令和3年ポスター



令和2年ポスター

